

石川県埋蔵文化財情報

第 54 号

巻頭図版（国分山遺跡 大聖寺城下町遺跡 中ノ江遺跡 末松遺跡）

令和7年度の発掘調査から 所長 中屋克彦 … (1)

発掘調査略報

国分山遺跡（七尾市） (6)

大聖寺城下町遺跡（加賀市） (10)

中ノ江遺跡（能美市・小松市） (12)

末松遺跡（野々市市） (14)

令和7年度の出土品整理作業 (16)

調査研究報告

横穴式木室と石室の結節点—加賀市三木5号墳の切石石材— 正田悠馬 … (22)

能美市・小松市高堂遺跡出土の未報告資料 正田悠馬・鈴木静華 … (34)

2026年8月

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

国分山遺跡

調査区遠景（南から）

遺跡は邑知低地帯西側の鷹合川と御祓川に挟まれた標高約 32m の低丘陵上に位置しており、周辺に細口源田山遺跡や国分尼塚古墳群などの弥生時代から中世にかけての墓域が確認されている。

方形周溝墓群と竪穴建物（西から）

調査区の北側で弥生時代後期後半の方形周溝墓 3 基と木棺墓 6 基、弥生時代終末期の竪穴建物 1 棟を検出した。1 号墓は同時期の能登地域において最大級の規模であり、時期に近い竪穴建物との関係性が問われる。



調査区遠景（南から）



方形周溝墓群と竪穴建物（西から）

写真解説

国分山遺跡

1号墓の埋葬施設から出土したガラス小玉・鉄石英製の管玉

1号墓の埋葬施設（SK21）からガラス小玉約80点と鉄石英製の管玉2点が出土した。ガラス小玉は当時日本で製作されておらず、大陸から半島を経由して列島へもたらされた。弥生時代後期の所産として県内最古級であり、能登地域では最多の出土量である。また管玉に用いられた鉄石英（通称：赤玉石）は佐渡島からの産出が推測され、当時の交流域の広さを表す。

木棺墓から出土した勾玉・管玉

SK21の南側に隣接する木棺墓（SK02）から勾玉3点と管玉20点が出土した。勾玉はいずれも北陸に顕著な半円形で、管玉は様々な石材で製作されている。いずれも弥生時代後期の所産として捉えられる。



1号墓の埋葬施設から出土したガラス小玉・鉄石英製の管玉



木棺墓から出土した勾玉・管玉

写真解説

大聖寺城下町遺跡

大聖寺城下町遺跡遠景（東から）

遺跡が所在する加賀市大聖寺は、寛永 16（1639）年に立藩した大聖寺藩の城下町である。市街地西方には、戦国時代に大聖寺城が築かれ、江戸時代には大聖寺藩の城下町として、大聖寺城の麓に築かれた藩邸を中心に武家屋敷や町屋、寺院などが建ち並んでいた。現在も多くの歴史的建造物が残されており、江戸時代の町割りを色濃く残した町並みを見ることができる。

調査区遠景（東から）

調査区は国道 305 号線菅生交差点に面しており、大聖寺城下町の東端に位置している。旧大聖寺川を渡った北国街道が城下町中心部に向かって西へ大きく曲がる地点にあたり、天明 6 年（1786）の大聖寺絵図には、北国街道に面した商家が描かれている。

発掘調査では、多数の土坑や小穴、石組遺構などを検出しており、江戸時代後期の陶磁器や土師器皿、石製品、木製品、銅銭などの遺物が多数出土した。



大聖寺城下町遺跡遠景（東から）



調査区遠景（東から）

写真解説

中ノ江遺跡

調査地遠景（北東から）

能美市中ノ江町と小松市蛭川町・高堂町にかけて広がる遺跡で、梯川の支流である八丁川右岸の沖積平野に立地している。令和6年度の調査では、弥生時代後期～古墳時代の集落跡と奈良・平安時代の自然流路を確認している。

今回の調査では、昨年度の調査に引き続き弥生時代後期～古墳時代にかけての掘立柱建物や平地式建物、素掘りの井戸などを確認したほか、土器や木製品などの多数の遺物が出土した。

平地式建物（北から）

調査区中央で平地式建物を確認した。柱穴からは沈下防止のための礎板や根がらみ出土している。また、柱穴の切り合い関係から建物は複数回にわたり建て替えられているとみられる。



調査地遠景（北東から）



平地式建物（北から）

写真解説

末松遺跡

調査区遠景（東から）

末松遺跡は、野々市市末松と中林にまたがる遺跡で、手取川扇状地の扇央部に立地している。昭和 60 年代以降の開発に伴う発掘調査が何度も行われており、縄文時代から中世の遺構や遺物が確認されている。

また、周辺には飛鳥時代に創建された北陸最古級の寺院である国史跡末松廃寺跡をはじめとして、多数の遺跡が確認されている。

調査区全景（西から）

今年度の調査区は石川県立大学の敷地内に所在している。発掘調査では、多数の遺構を確認しており、発掘調査では縄文時代、奈良・平安時代の掘立柱建物の柱穴や土坑、溝、小穴などを確認した。遺物は少量であったが、縄文土器や土師器、須恵器、陶磁器片などの土器に加え、打製石斧などの石製品が出土した。

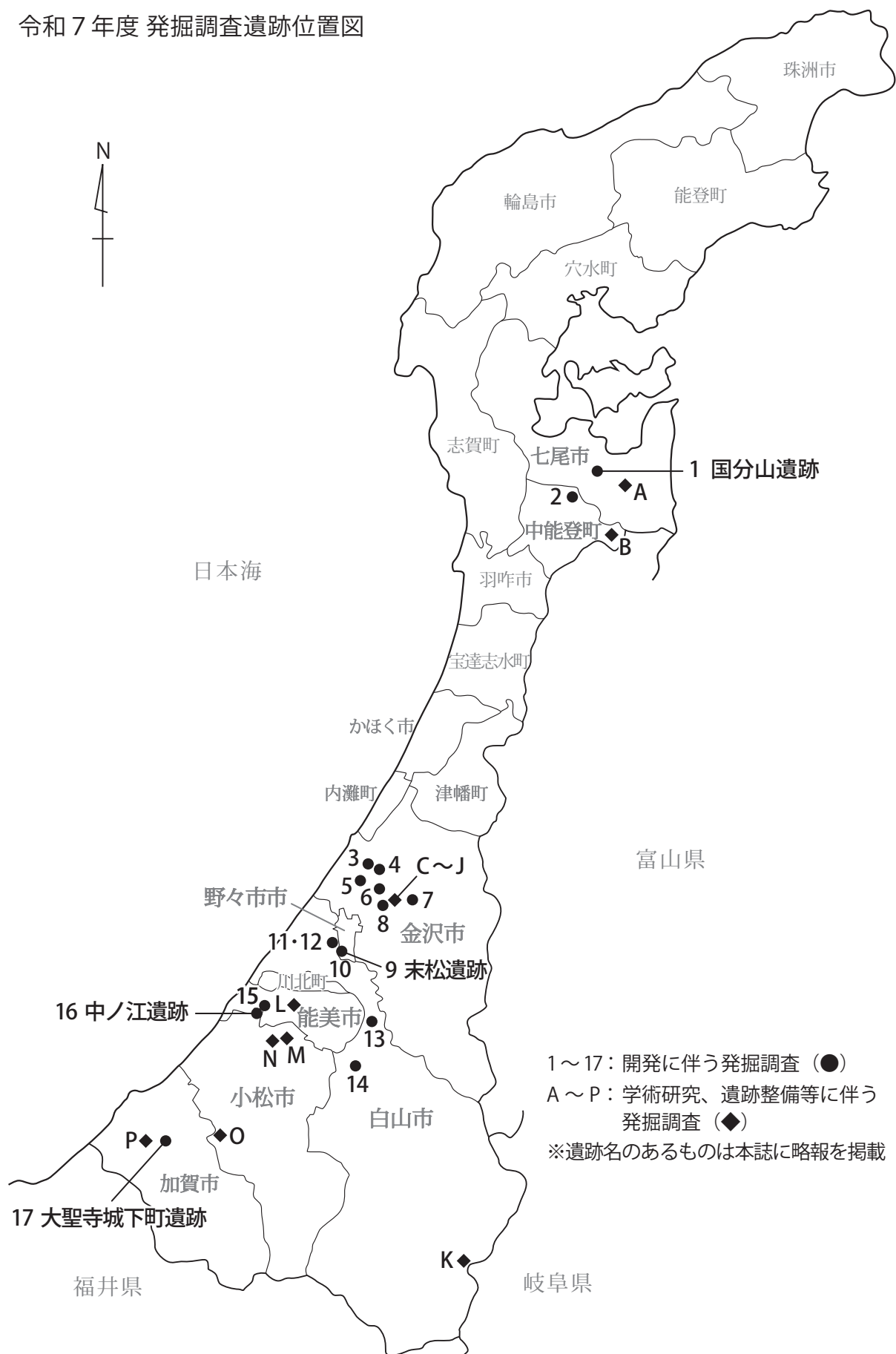


調査区遠景（東から）



調査区全景（西から）

令和7年度 発掘調査遺跡位置図



1～17：開発に伴う発掘調査（●）

A～P：学術研究、遺跡整備等に伴う
発掘調査（◆）

※遺跡名のあるものは本誌に略報を掲載

令和7年度の発掘調査から

所長 中屋克彦

はじめに

令和7年度に県内では、開発に伴う緊急発掘調査17件26,082㎡と、学術調査及び保存目的の発掘調査16件1,212㎡がそれぞれ実施された。令和6年度と比較すれば、緊急発掘調査は1件増加したものの面積は9,545㎡の大幅減となった。白山市、野々市市での区画整理事業が一段落を迎えつつあることが大きな要因と考えられる。一方、学術調査及び保存目的の調査は5件増の16件となったが、面積は1,212㎡（1,462㎡減）にとどまった。

緊急発掘調査を地域別でも、金沢市に集中する状況が顕著で、6件17,048㎡の発掘調査が実施された。一方、能登地域では七尾市、中能登町で各1件が実施されたのみで、特に奥能登地域では令和6年度に続き、学術調査及び保存目的の調査を含め、発掘調査は実施されなかった。また、南加賀地域でも小松市、能美市、加賀市でそれぞれ1件（中ノ江遺跡は小松市と能美市にまたがる調査で1件に数える）の実施にとどまり、金沢市域以外の調査は低調に推移している。

学術調査及び保存目的の調査は、七尾市、中能登町、金沢市、白山市、能美市、小松市、加賀市で8機関が実施しているが、保存目的の調査のうち10件が、令和6年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」などによる災害復旧関連の調査となっている。

なお、現地説明会は、県民が発掘現場で調査担当者の説明を聞きながら、調査成果に直接触れる大切な機会であり、令和7年度は、別表のNo.1・3・13・M・Oなどで実施されている。

1. 石川県埋蔵文化財センターが実施した緊急発掘調査

令和7年度に県教委から当財団に委託された発掘調査は、4件5,550㎡で、令和6年度より件数は2件増えたものの面積は同じで、2年続けて平成10年の財団設立以降、最少の調査面積となった。しかしながら令和7年度以降、一旦途切れていた国交省関連事業の調査再開や、埋蔵文化財への影響が見込まれる大型プロジェクトの報道などがあり、発掘調査が増加に転ずる兆しがみられる。

地域別でみると、能登地域1件（No.1 国分山遺跡（七尾市））、加賀地域3件（No.9 末松遺跡（野々市市）、No.16 中ノ江遺跡（小松市・能美市）、No.17 大聖寺城下町遺跡（加賀市））である。なお、これまでのところ、能登の復興関連事業に関わる発掘調査の依頼はなく、震災前からの継続事業である宅田上野山遺跡（輪

令和7年度に当法人が実施した発掘調査遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	調査面積	事業者	事業名
1	国分山遺跡	七尾市国分町、細口町	弥生、古墳、近世	墳墓、集落跡	3,000㎡	国土交通省	一般国道470号 能越自動車道 田鶴浜七尾道路
2	中ノ江遺跡	小松市高堂町、能美市中ノ江町	弥生、古墳	集落跡	500㎡	県土木部	一般県道粟生小松線
3	大聖寺城下町遺跡	加賀市大聖寺永町	近世	集落跡	620㎡	県土木部	一般県道申加賀線
4	末松遺跡	野々市市末松、中林	縄文、古墳、古代、近世	集落跡	1,430㎡	公立大学法人 石川県立大学	石川県立大学体育館改築
4 件					5,550㎡		

島市)の発掘調査は中断したままとなっている。

各遺跡の調査概要は後掲の発掘調査略報を参照願いたい、ここでは簡単にその成果に触れておく。

国分山遺跡は、鷹合川と御祓川に挟まれた標高32m前後の低丘陵上に立地する遺跡で、内容がはっきりしない散布地とされていた。今回の調査では、弥生時代後期から終末期にかけての方形周溝墓群や木棺墓群、竪穴建物などを確認し、周溝墓の埋葬施設や木棺墓の一部から、副葬品の勾玉や管玉、ガラス玉が出土した。近隣の丘陵上には、方形周溝墓群と中世の木棺墓群が確認された細口源田山遺跡や、前方後方墳が2基並ぶ国分尼塚古墳群などが所在しており、一帯の丘陵上が弥生時代から中世にかけ、墓域として利用されてきたことが明らかとなった。

中ノ江遺跡は、梯川の支流である八丁川の右岸に位置する弥生時代から中世にかけての集落跡で、令和6年度に続き2年目の調査である。今回の調査でも、弥生時代後期～古墳時代の掘立柱建物、平地式建物、井戸、溝、土坑などが検出され、弥生土器や緑色凝灰岩の剥片、建物の柱根などが出土した。

大聖寺城下町遺跡は、大聖寺藩の城下町遺跡で、大聖寺城が立地した錦城山の東に位置し、一帯には現在も江戸時代の町割りを色濃く残した町並みが残る。今回の調査区は城下町の東端に位置しており、江戸時代後期の敷地造成の痕跡を確認し、石組遺構や土坑などが検出された。

末松遺跡は、手取川扇状地の扇央部に位置する、縄文時代、古代、中世の集落跡である。調査では土坑、小穴、溝などが検出され、少量ながら縄文土器、須恵器、打製石斧などが出土した。

2. 市町が実施した緊急発掘調査

市町が調査主体となった緊急発掘調査は、13件20,532㎡である。令和6年度より件数は1件減少し、面積は9,500㎡余り減少している。市町別では、金沢市が6件17,048㎡、白山市が4件1,513㎡、中能登町、野々市市、能美市が各1件で合わせて1,971㎡であり、区画整理事業等に伴う調査が実施されている金沢市が突出している。

金沢市南新保ゴマジマチ遺跡(No.3)では、古墳時代前期の前方後方墳や方墳が確認された。古墳はいずれも墳丘が削平され、周溝のみの検出であったが、北加賀地域最大規模の全長34mと33.3mのほぼ同形・同軸の前方後方墳が2基並列する希少な確認例となった。また、これらの周溝からは、古墳に立て並べられていたとみられる「笠形木製品」が出土しており、国内初の前方後方墳からの出土例として注目される。この他、金沢市南新保C遺跡(No.4)や駅西本町1丁目遺跡(No.6)では、弥生時代～古墳時代の平地式建物などが検出されているほか、金沢城下町遺跡(西外惣構跡香林坊2丁目12番地点)(No.8)では金沢城西外惣構の堀跡を確認している。

野々市市末松遺跡(No.10)では、古代の竪穴建物3棟や、古代及び中世の掘立柱建物が検出された。

白山市白山町遺跡(No.13)では、手取川に沿って作られた中世の道路状遺構が確認された。

3. 学術調査、保存目的の発掘調査

学術調査または保存目的の発掘調査は16件で、うち8件は石川県金沢城調査研究所が実施した能登半島地震災害復旧に伴う調査である。先の地震では、国史跡金沢城跡内で5地点(C～H)、特別名勝兼六園内で2地点(I・J)の石垣が崩落したほか、23地点で石垣の変形が確認されている。復旧調査では崩壊した石材の原位置の特定や内部構造等の確認を行い、元通りに石垣を積み直すための資料を提供している。

七尾市の国史跡七尾城跡(A)では九尺石北西の崩落した斜面の調査を行い、16世紀代に施されたと想定される深さ2m以上の盛土を確認し、土師器や天目茶碗などが出土している。

中能登町の国史跡石動山（B）では、崩れた石垣背面の調査により復元前の石垣栗石層が確認され、白磁片などが出土している。

白山市大汝峰遺跡（K）では、白山大汝峰の登山道付近で経塚を調査し、一部が露出していた経筒を取り上げている。

小松市那谷寺遺跡（O）の調査は、那谷寺の文化財総合調査と並行して行われているもので、中世那谷寺の遺構残存状況などの把握を目的としており、谷あいに残る平坦面の調査が行われた。

また、金沢学院大学は、昨年度に引き続き小松市等と連携して、河田山9号墳（H）のトレンチ調査を実施し、周溝の堆積を確認している。今後も官学の連携が進むことが期待される。

令和7年度 県内遺跡発掘調査一覧

◎開発に伴う緊急発掘調査

No.	遺 跡 名	所 在 地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
1	国分山遺跡	七尾市国分町、細口町地内		○	○			○	3,000	県
	弥生時代後期～終末期の方形周溝墓と木棺墓、竪穴建物などを確認。埋葬施設からはガラス小玉、石製の勾玉、管玉が出土。その他、弥生土器(後期～終末期)、石器(石鏃、石錘、石斧)等が出土。									
2	廿九日ヒガシデ遺跡	中能登町廿九日地内			○	○			307	町
	大型土坑やピットが集中しており、集落の一部と考えられる。大型土坑は近隣の在江遺跡で確認されたものと規模・形態が近似する。ほかに土坑、ピットを検出し、弥生土器・土師器・須恵器・木製品が出土。									
3	南新保ゴマジマチ遺跡	金沢市大友地内		○	○				9,000	市
	北加賀最大を含む前方後方墳2基、陸橋部をもつ方墳1基を検出。前方後方墳の周溝からは底部穿孔壺や多様な木製品が出土しており、特に北陸初かつ国内最古の事例となる笠形木製品が6点出土。									
4	南新保C遺跡	金沢市南新保町地内		○	○	○			4,600	市
	弥生時代中期～古墳時代前期の平地式建物2棟、柱穴、土坑、溝を検出。調査区北西側では、幅25mの溝群が45mにわたって検出され、弥生時代中期～古墳時代前期の土器が出土。									
5	出雲じいさまだ遺跡	金沢市戸板地内		○	○			○	195	市
	戸板小学校の増築に伴う発掘調査。弥生・古墳時代の土坑と近世の用水を検出。遺物は土器の細片が主で、これまでの調査で見つかった玉作り関連の遺構・遺物は見られなかった。									
6	駅西本町1丁目遺跡	金沢市駅西本町地内		○					495	市
	弥生時代後期～終末期の集落遺跡。平地式建物1棟と掘立柱建物1棟、柱穴、溝、河跡が検出され、河跡から弥生土器のほか、槽や階段などの木製品が出土。									
7	材木町遺跡（13番地点）	金沢市材木町地内						○	2,658	市
	材木小学校跡地の整備に伴い道路築造部分及び防火水槽埋設部分を調査。石組井戸や小道跡を検出。近世陶磁器や土器、木製品などが出土。									
8	金沢城下町遺跡（西外惣構跡香林坊2丁目12番地点）	金沢市香林坊地内						○	100	市
	西外惣構の堀跡を検出。現在の水路東岸天端から約2.9mの箇所まで落ち込みを確認。調査は堀底まで達していない。速報値だが、土居基底部幅約9.8m、堀幅約9.6m前後と推定。									
9	末松遺跡	野々市市末松、中林地内	○		○	○	○		1,430	県
	縄文時代、古代、中世の遺構と遺物を確認。多数の小穴のほか、末松廃寺の創建時期に近い、7世紀の須恵器が土坑から出土。									
10	末松遺跡	野々市市中林地内	○	○	○	○	○		1,169	市
	古代及び中世の集落を確認。古代の竪穴建物3基、古代・中世ともに掘立柱建物と考えられる柱穴列を検出。									
11	福正寺タカダ遺跡	白山市福正寺町地内		○	○	○			441	市
	竪穴式住居を検出。遺物として古代の須恵器を確認。									
12	末松ダイカン遺跡	白山市木津町地内		○	○	○			42	市
	遺構としては旧河川を確認。遺物として土師器と須恵器を確認。									

No.	遺 跡 名	所 在 地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
13	白山町遺跡	白山市白山町地内	○				○		830	市
	道路状遺構を検出。遺物としては、縄文土器、カワラケ等が出土。									
14	上野B遺跡	白山市上野町地内	○						200	市
	包含層の一部を調査。									
15	中ノ庄遺跡	能美市五間堂町地内		○	○	○	○		495	市
	掘立柱建物・溝・土坑・小穴を確認。弥生土器・土師器・須恵器・石製品・木製品が出土。									
16	中ノ江遺跡	小松市高堂町、 能美市中ノ江町地内		○	○				500	県
	弥生時代後期～古墳時代の掘立柱建物、平地式建物、井戸、溝、土坑、小穴を確認。弥生土器や土師器、石斧、緑色凝灰岩の剥片、柱根等が出土。									
17	大聖寺城下町遺跡	加賀市大聖寺永町地内						○	620	県
	大聖寺城下町遺跡南東端の北国街道に面した場所を調査。江戸時代後期（18世紀後半）に川沿いの土地を大規模に造成し、町屋として いる。陶磁器や土師器皿、石製品等が出土。									

【調査担当】市・町：市・町教育委員会等 県：県埋蔵文化財センター

◎学術研究、遺跡整備等に伴う発掘調査

No.	遺 跡 名	所 在 地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
A	七尾城跡	七尾市古屋敷町地内					○		21	市
	九尺石北西の崩落斜面を発掘調査、深さ2m以上の盛土を検出。盛土の土中に中世土師器が含まれており、16世紀代の年代を想定。また、トレンチ上層の崩落土からは、中世土師器のほか、国産天目茶碗の破片などが出土。									
B	石動山	中能登町石動山地内						○	8	町
	石垣背面調査により、復元前の石垣栗石層を確認した。瓦（近代以降か）や白磁片が出土。									
C	金沢城跡（本丸北）	金沢市丸の内地内						近代	30	城
	本丸北石垣の解体調査を実施。解体範囲は、近代に旧陸軍が煉瓦トンネルを構築した際に改変し、令和6年能登半島地震により崩落した変形部分。今年度は、石材34石を解体。									
D	金沢城跡（本丸南）	金沢市丸の内地内						近代	164	城
	本丸南側に付設された近代階段で、崩落石材回収・石垣解体調査・上部解体範囲の調査を実施。今年度は崩落石材146石、解体石材60石を回収・調査。									
E	金沢城跡（石川門前土橋）	金沢市丸の内地内						○	70	城
	石川門前土橋北面の石垣解体調査と上面遺構調査を実施。土橋路盤面などを確認。解体した石垣は、幕末から明治時代にかけて積み直されたと推定でき、近世中期に改修された栗石層も確認。今年度は石材145石を解体調査。									
F	金沢城跡（御居間先下）	金沢市丸の内地内						○	140	城
	御居間先下石垣の解体調査に先行し、上面遺構調査を実施。近世後期の太鼓塀等の控柱抜き取り痕跡や塚の区画である熨斗立ての基礎等を確認。また、地表面では見られなかった地震による亀裂を新たに確認。									
G	金沢城跡（玉泉院丸南）	金沢市丸の内地内						○	90	城
	玉泉院丸南側の堀（現況は園地）に南面する石垣の解体調査と上面遺構調査を実施。調査範囲の大半は、昭和40年代の石垣改修により改変を受けていたが、一部に近世期の盛土が残存することを確認。今年度は、石材49石を解体調査。									
H	金沢城跡（玉泉院丸南西）	金沢市丸の内地内						○	170	城
	玉泉院丸南西隅に位置する石垣で、解体調査を実施。令和6年度の上半部に続き、今年度は、下半部石材151石を対象。									
I	兼六園（栄螺山）	金沢市兼六町地内						○	100	城
	霞が池の南に位置する栄螺山では、石材152石を解体調査。									
J	兼六園（辰巳用水）	金沢市兼六町地内						○	160	城
	霞が池の北側斜面に位置する、辰巳用水を埋設した石塁状石垣で、崩落石材81石を回収・調査。									
K	大汝峰遺跡	白山市白峰地内				○	○	○	2	市
	経塚を調査し経筒が出土。									

No.	遺 跡 名	所 在 地	主な時代						面積	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	m	
L	西山古墳群	能美市徳久町地内			○				12	市
	古墳の墳丘盛土、周溝を確認。土師器が出土。									
M	河田山9号墳	小松市国分台地内			○				16	大学
	古墳北東隅においてトレンチ調査を実施し、1980年代の調査で確認していた北側周溝の続きとみられる土の堆積を確認。一方、これに続く東側周溝は判然としなかった。									
N	南野台遺跡	小松市古府町地内	○	○	○	○	○		16	市
	加賀国府・国分寺関連遺跡確認調査。古代の礎敷遺構の広がり及び、その上面の整地層を確認。									
O	那谷寺遺跡	小松市那谷町地内					○		145	市
	中世以前における那谷寺の実態解明に向けた確認調査で、昨年度に続き旧明王院と伝わる地区を調査。新たな礎石建物が確認され、15～16世紀の土師器皿や陶磁器、金属器、石製品などが出土。									
P	大聖寺藩邸跡	加賀市大聖寺八間道地内						○	68	市
	園池付近で過去の導水施設（陸部からの排水設備）の可能性がある石製品を検出。現在の陸部が、近代に大きく盛り土されていることを確認。									

【調査担当】市：市教育委員会等 城：県金沢城調査研究所 大学：金沢学院大学

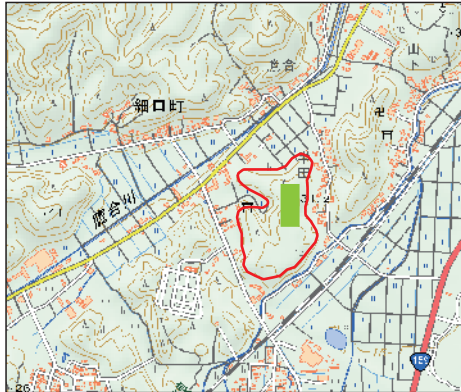
こくぶやま 国分山遺跡

所在地 七尾市国分町地内

調査面積 3,000㎡

調査期間 令和7年6月6日～同年12月25日

調査担当 土屋宣雄 安中哲徳 石田健 正田悠馬
知田真幸 平林英大 石川諒



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・ 弥生時代後期後半の方形周溝墓4基、木棺墓6基を検出し、調査区北側では3基の方形周溝墓が接続していた。
- ・ 1号墓の埋葬施設からは多量のガラス小玉が、1号墓内の木棺墓1基からは勾玉と管玉が良好な状態で出土した。
- ・ 弥生時代終末期の竪穴建物1棟を検出した。
- ・ 調査区南端に4基目の方形周溝墓を検出し、南側へ墓域が広がると想定される。

七尾市に所在する国分山遺跡は、邑知低地帯西側の鷹合川と御祓川に挟まれた標高約32mを測る低丘陵上に立地する遺跡である。一般国道470号 能越自動車道 田鶴浜七尾道路の建設工事に先立ち、令和7年度から調査を開始した。以前より周知の埋蔵文化財包蔵地として認定されていたが、国分山遺跡としては初めての発掘調査である。

周囲の丘陵上には弥生時代中期の方形周溝墓群や中世の火葬墓群を確認した細口源田山遺跡、古墳時代前期の前方後方墳を擁する国分尼塚古墳群など、弥生時代から中世に至るまでの墓域が展開していることが既往の調査により把握されており、国分山遺跡でも古墳等の墓域が存在すると想定された。

調査の結果、調査区の北側で弥生時代後期を中心とする方形周溝墓3基、木棺墓6～8基、竪穴建物1棟を確認した。

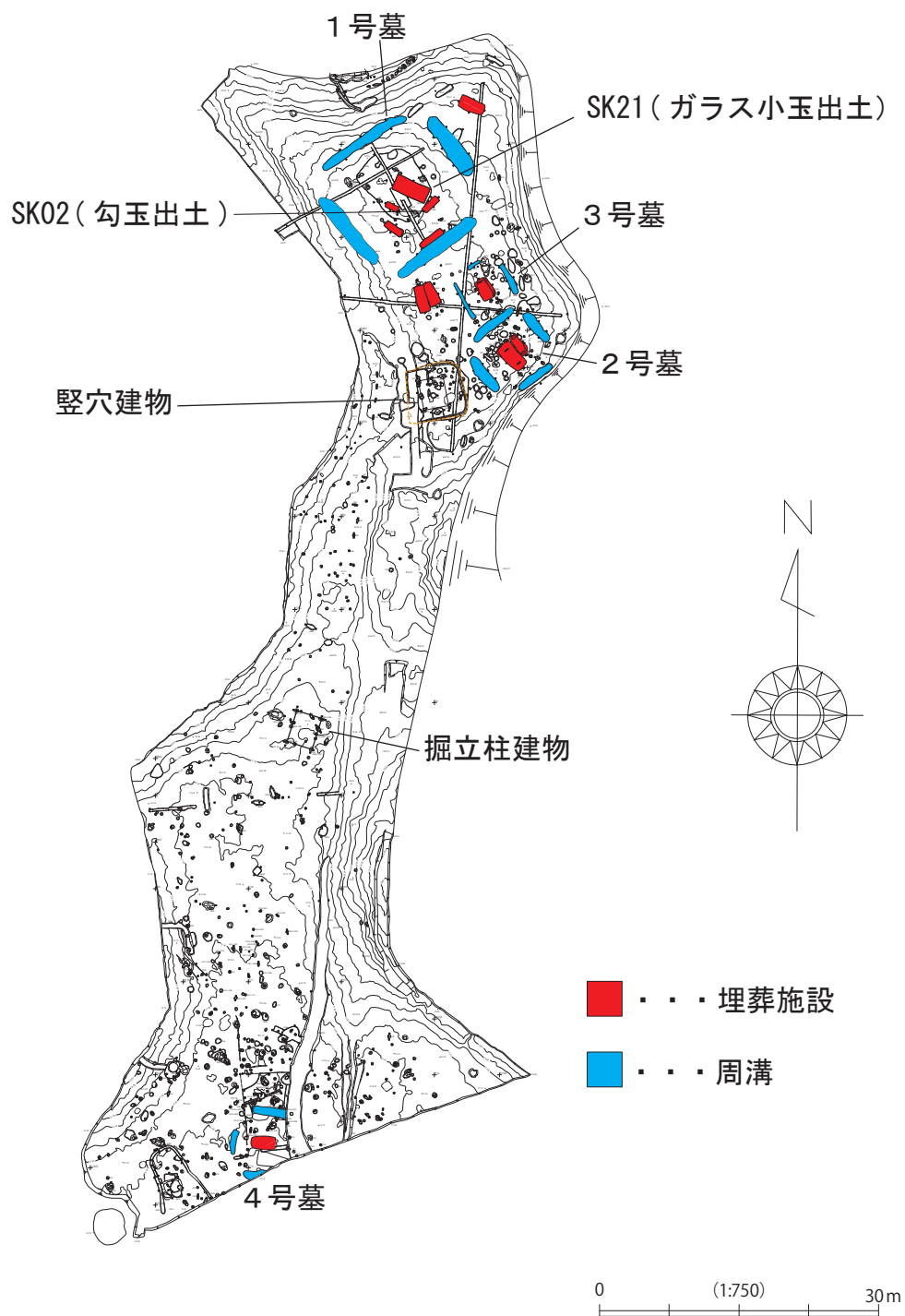
方形周溝墓の周溝はいずれも四隅切れであり、その規模は周溝内側で1号墓は約13m四方、2号墓は約6.4m四方、3号墓は約5.8m×5.0mを測る。1号墓の中心埋葬施設SK21は長さ3.8m×幅1.7mの規模を測る墓壙を有し、内部に長さ2.4m×幅60cmの木棺の痕跡を確認した。1号墓の周溝墓としての規模や木棺の規模は、同時期の能登で最大級である。木棺の周囲には長さ3.0×幅1.0mの木槨状の痕跡を確認しており、木槨墓としての性格を持つと想定される。

木棺内部からは、ガラス小玉約80点と鉄石英製の管玉2点が北側を中心に散在して出土した。

ガラス小玉は2mm程度の大きさで、スカイブルーを主体とした色調のカリガラス製とみられるものに加え、緑がかった色調の個体も見受けられた。鉄石英製の管玉2点はそれぞれ太く短い形状と細長い形状のもので、後者は佐渡島で製作されたものと推測できる。弥生時代のガ



能登国分寺跡を臨む（北西から）



国分山遺跡平面図（令和7年度調査区）

ラス小玉としては県内3番目の出土量である。

2号墓と3号墓は周溝を共有しており、周溝の規模から2号墓が先行すると考えられる。2号墓の埋葬施設SK10も木槨構造の可能性はある。3号墓の埋葬施設SK08からは管玉が1点出土した。

1号墓の周囲には木棺墓を6基検出し、その他に周溝内埋葬とみられる土坑を2基検出した。木棺墓の構造はいずれも小口板を地山に差し込む形態で、その長さは1～2mとバラつきがある。

SK21の南側に隣接する木棺墓SK02からは、石製の勾玉3点と管玉20点が出土した。頭側とみられる部分からまとまって出土したことから、被葬者が身につけた装身具であったと考えられる。勾玉はいずれも半球形である。管玉は濃淡に幅のある緑色を主体としており、いずれも細長い形状である。

竪穴建物SI01は2号墓の西側に隣接しており、およそ6.5m四方の規模を持つ隅丸方形の形状である。4本の支柱を有し、中央には炉跡、南側に貯蔵穴を確認した。北側には壁溝を切り込む大型の土坑があり、掘り直した貯蔵穴の可能性はある。弥生時代終末期を中心とする土器が出土しておりSI01は方形周溝墓に近似する時期に建てられた可能性が高く、その性格については現時点で不明である。

調査区中央から南側にかけての部分では、方形周溝墓1基（4号墓）のほか、掘立柱建物1棟、炭窯とみられる土坑などを検出した。方形周溝墓4号墓は調査区南端に位置しており、南側へ墓域が展開すると予想される。

（正田悠馬）



SK02（上段：勾玉・管玉）、SK08（下段左端：管玉）、SK21（下段右側：ガラス小玉・管玉）から出土した玉類



方形周溝墓群と竪穴建物



1号墓中心埋葬施設SK21（南東から）



弥生時代終末期の竪穴建物（西から）



木棺墓SK02（南から）



SK21から出土したガラス小玉・管玉



SK02から出土した勾玉・管玉



4号墓検出状況（南から）



1号墓周辺の発掘調査作業風景（南から）

だいしょうじじょうかまち
大聖寺城下町遺跡

所在地 加賀市大聖寺永町地内
調査面積 620㎡

調査期間 令和7年5月23日～同年8月18日
調査担当 川畑 誠、岩城榮淳、中川京太郎



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・江戸時代後期(18世紀後半)に、川沿いの土地を大規模に造成していることを確認した。
- ・敷地造成後、現代に至るまで同じ面で地割の変更や建物の建替えを繰り返してきたことを確認した。
- ・多数の土坑や小穴、石組遺構などを検出した。
- ・18世紀後半以降の陶磁器や土師器に加え、瓦や木製品、銅銭などが多数出土した。

大聖寺城下町遺跡は、加賀市大聖寺永町地内に所在している。今回の調査は一般県道串加賀線の改築事業に伴い、令和7年5月23日～8月18日の期間で、620㎡を対象として実施した。

遺跡が所在する加賀市大聖寺は、寛永16(1639)年に、加賀藩2代藩主前田利常が隠居する際、三男の利治に江沼郡と能美郡の一部を割いて立藩した大聖寺藩の城下町である。現在も江戸時代の町割りを色濃く残した町並みが残されている。

今回の調査区は国道305号線菅生交差点に面した県道事業地であり、大聖寺城下町の東端に位置している。金沢・小松方向から続く北国街道が北から旧大聖寺川を渡り、城下町中心部に向かって西へ大きく曲がる地点にあたる。この場所は、天明6年(1786)の大聖寺絵図に、北国街道に面した「敷地ヤ」「崎野ヤ」「山中ヤ」などの家号をもつ商家が描かれている。発掘調査では、多数の土坑や小穴、石組遺構などを検出しており、近代のものと考えられる赤瓦等に加えて、江戸時代後期の陶磁器や土師器皿、石製品、木製品、銅銭などの遺物を



赤瓦などが出土した小穴



造成土から出土した土師器皿

多数確認した。また、調査区南半部(A区)および北半部(B区)とも、川沿いの土地を大規模に造成していることが判明した。その時期は、造成土から多数出土した土師器皿から、江戸時代後期(18世紀後半)と考えられる。この土地は同じ造成面で地割の変更や建物の建替えを繰り返しており、現代に至るまで宅地や商店として土地を利用してきたことがわかった。

今後の整理作業の進捗により、往事の城下町の生活の一端がより一層明らかになることが期待される。

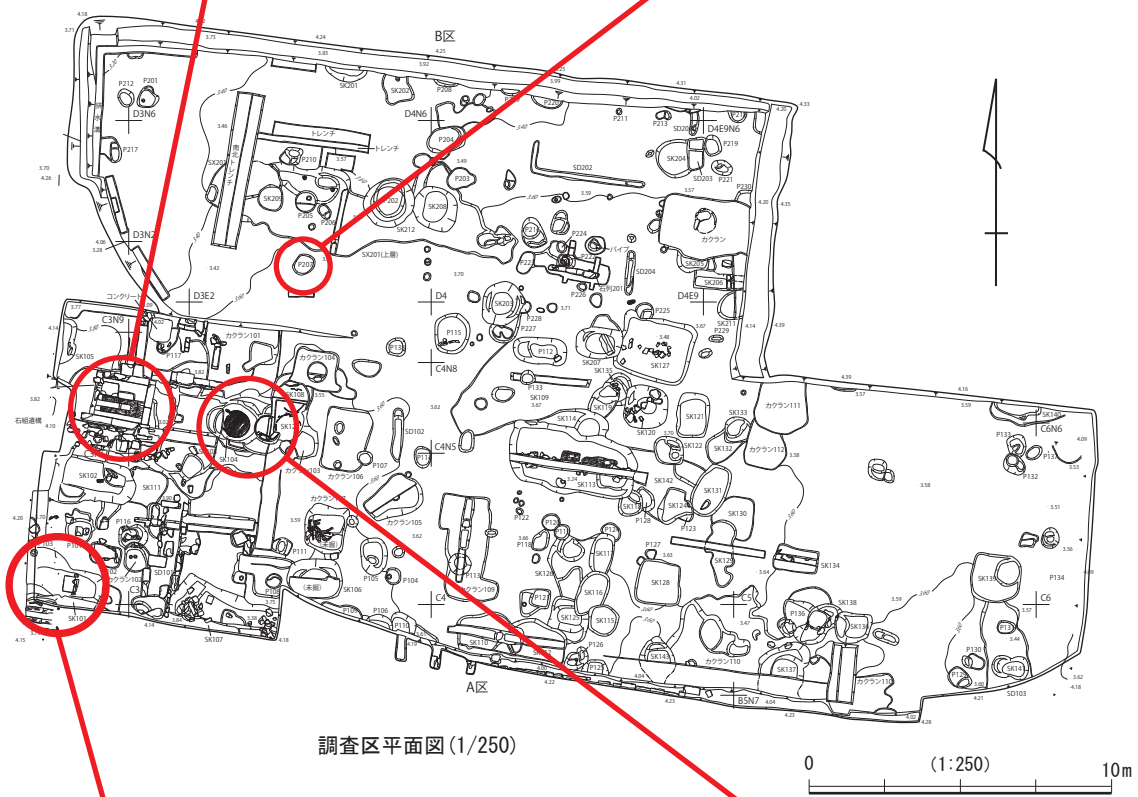
(中川京太郎)



石組遺構と木製品



小穴から出土した土師器皿



土坑から出土した木製品



土坑から出土した桶底板

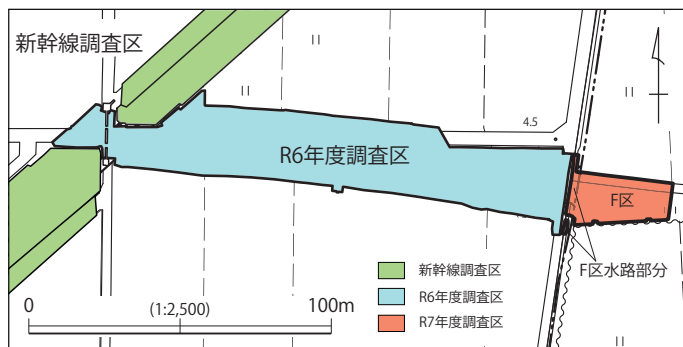
なかのこう 中ノ江遺跡

所在地 能美市中ノ江町・小松市高堂町地内
調査面積 500㎡

調査期間 令和7年10月14日～同年12月15日
調査担当 松山和彦 知田真幸 石川 諒



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区区割 (S=1/2,500)

調査成果の要点

- ・昨年度の調査に引き続き弥生時代後期～古墳時代の集落を確認した。
- ・弥生時代後期～古墳時代の掘立柱建物や平地式建物などの建物跡を検出した。また、素掘りの井戸も確認した。
- ・弥生土器、土師器などの土器、石斧や緑色凝灰岩の剥片などの石製品、柱根や礎板などの木製品が出土した。

中ノ江遺跡は、能美市中ノ江町と小松市蛭川町・高堂町にまたがって広がる遺跡で、梯川の支流である八丁川右岸の標高約3.0～4.0mの沖積平野に立地している。平成28年度と令和2年度に北陸新幹線建設に先立つ発掘調査がおこなわれ、主に弥生時代後期～古墳時代と中世の集落が確認されている。また、令和6年度から一般県道粟生小松線の改築事業に伴い発掘調査が開始され、調査の結果、弥生時代後期～古墳時代の集落と奈良・平安

時代の自然流路が確認された。今回の調査はその第2次調査にあたる。

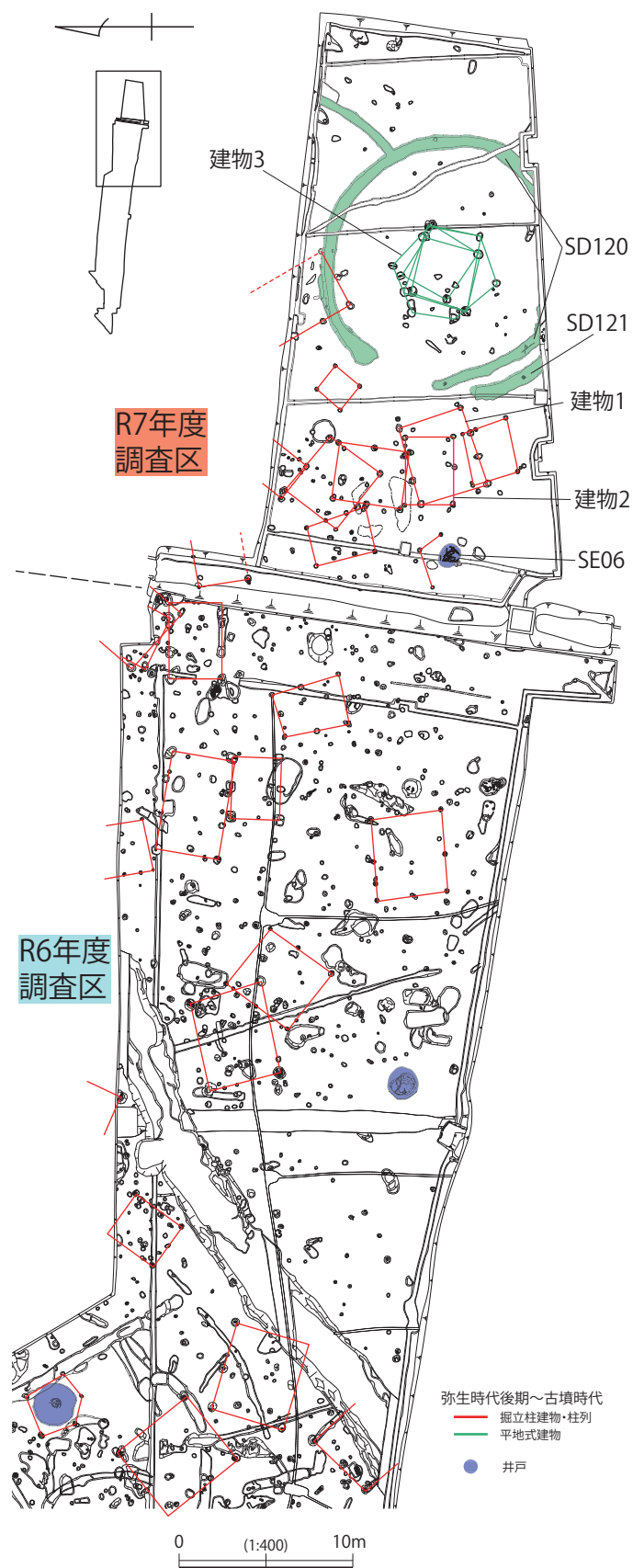
今回の調査地は、遺跡範囲の北東部分で、昨年度調査区の東側に隣接した区域になる。遺構検出面の標高は、概ね約3.6～3.8mを測り、北から南に向けてわずかに傾斜している。現地調査では、調査区をF区とF区水路部分に区分して調査をおこなった。

調査の結果、弥生時代後期～古墳時代の建物、井戸、溝、土坑、小穴などを検出した。遺構は、調査区西側～中央にかけて比較的分布密度が高く、昨年度の調査区東端から東側にも集落が展開していることが明らかになった。建物は、掘立柱建物と平地式建物の2つの形態が確認でき、建て替えも含めて14棟を想定している。平地式建物は周溝をもち、周溝内で復元される建物の1棟は、柱穴が6本の建物とみられる（建物3）。また、柱穴からは地盤沈下を防ぐための礎板や根がらみ出土している。なお、柱穴の切り合いなどから複数回にわたり建て替えられていると考えられるが、さらなる検討が必要であり今後の課題である。井戸は、素掘りのもの（SE06）を1基確認した。深さは約0.6mで、井戸内からは主に古墳時代中期頃の土器のほか、木製品などが多数出土している。

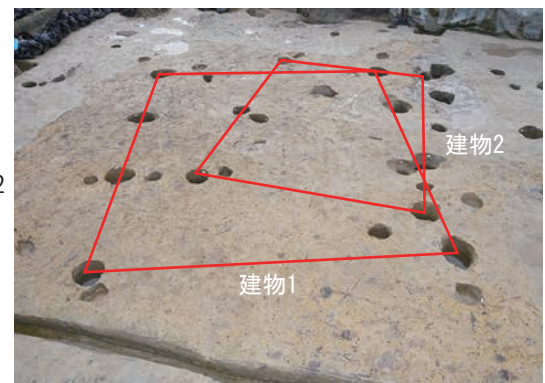
今回の調査でも弥生時代後期～古墳時代の集落を確認することができた。今後の調査によって、本遺跡の様相が一層明らかになるものと期待される。（知田真幸）



発掘作業風景（北西から）



掘立柱建物と平地式建物（上空から）



掘立柱建物（建物1・2、北東から）



遺物出土状況（SD120、北西から）



井戸遺物出土状況（SE06、東から）

遺構全体図 (S=1/400)

すえまつ 末松遺跡

所在地 野々市市末松1丁目、中林2丁目地内
調査面積 1,430㎡

調査期間 令和7年8月4日～同年11月28日
調査担当 岩城栄淳、中川京太郎、鈴木静華



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・縄文時代、奈良・平安時代の土坑や溝、小穴など、多数の遺構を確認した。
- ・多数の柱穴（柱痕跡）を検出した。
- ・須恵器・土師器等の土器に加え、打製石斧などの遺物が出土した。
- ・近隣に所在する末松廃寺の創建時期に近い、7世紀頃の須恵器が出土した。

末松遺跡は、野々市市末松1丁目・中林2丁目地内に所在しており、手取川扇状地の扇中央部に立地している。今回の調査は石川県立大学体育館改築工事に伴うもので、令和7年8月4日～11月28日の期間で、1,430㎡を対象として実施した。

本遺跡は昭和60年代以降、石川県立大学や国道157号線等の開発に伴う発掘調査が何度も行われており、縄文時代から中世の遺構や遺物が確認されている。また、周辺には飛鳥時代に創建された北陸最古級の寺院である国史跡末松廃寺跡をはじめとして、多数の遺跡が確認されている。

今年度調査を実施したのは、古代の建物跡や道路状遺構などが確認された平成14・15・19年度調査区の北側で、西側のA区と東側のB区に分けて調査を実施した。調査の結果、A区は土地造成によって大幅な削平を受けていたが、B区では縄文時代、奈良・平安時代の掘立柱建物の柱穴や土坑、溝、



調査区遠景 (南から)



出土遺物

小穴など、数多くの遺構を確認した。また、遺物は少量だが縄文土器や土師器、須恵器、陶磁器片などの土器に加え、打製石斧などの石製品が出土している。出土した須恵器の一部は、末松廃寺の創建と同時期である7世紀頃のものと考えられる。

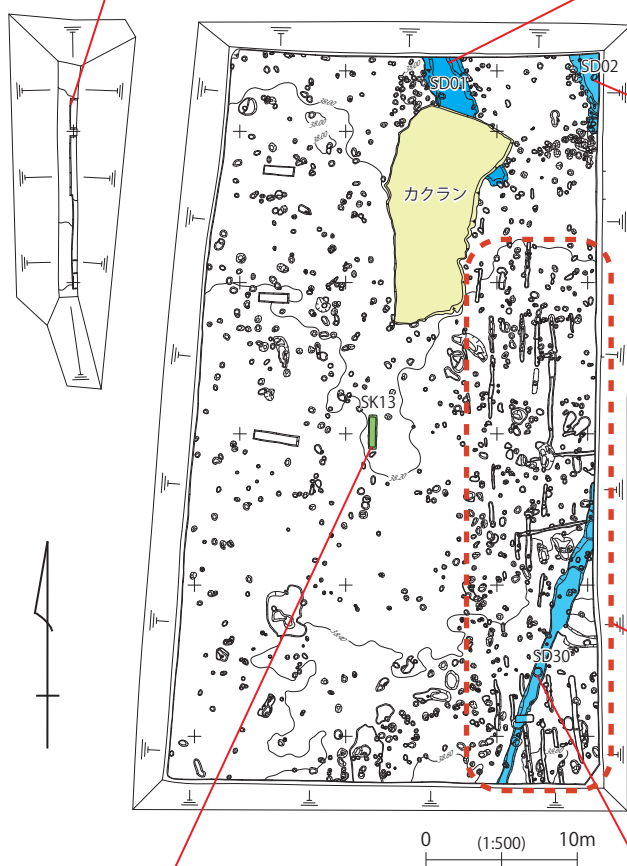
今回の調査では、縄文時代、奈良・平安時代の遺構や遺物を確認したことに加え、末松廃寺創建に近い時期の遺物が出土したことから、末松廃寺周辺の人間活動の広がりがより一層明らかになった。(中川京太郎)



A区の完掘状況(南西から)



SD01とカクランの完掘状況(北から)



調査区平面図(1/500)



SD02の完掘状況(北から)



B区南側の完掘状況(北東から)



土坑(SK13)から出土した7世紀ごろの須恵器



SD30の完掘状況(北東から)

令和7年度の出土品整理作業

国関係調査グループ

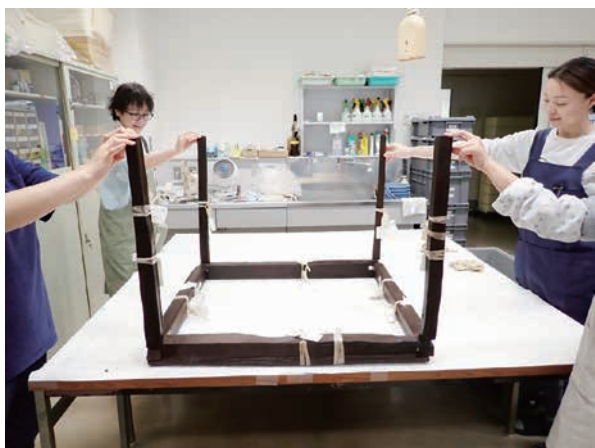
令和7年度は、一針C遺跡(小松市 平成30年度調査)、高堂二反田遺跡(小松市 令和6年度調査)、中ノ江遺跡(能美市 令和6年度調査)、金沢城跡(金沢市 令和4～6年度調査)、宅田上野山遺跡(輪島市 令和5年度調査)、庄・西島遺跡(加賀市 平成30年度調査)の出土品整理を行った。

一針C遺跡では、土器、木器、金属器、石器の実測・トレースを行った。SE04の井戸枠の部材が残りの良い状態だったので、縦板の剝離の接合を確認することができ、棧や隅柱の組み立てについても試みる事ができた。その他、船材転用の井戸や曲物なども実測した。

高堂二反田遺跡では木器の分類・接合、土器の記名・分類・接合を、中ノ江遺跡では木器の分類・接合を行った。中ノ江遺跡出土のくりぬきの井戸材一つ一つの片がとて大きく重く、接合を確認するのが難しかった。

金沢城跡では土器と瓦の、宅田上野山遺跡では土器と石器の、記名・分類・接合を行った。宅田上野山遺跡では、大量の石の剝片や石核などの選別に時間を要した。

庄・西島遺跡では土器、石器、金属器、木器の実測・トレースを行った。大型の須恵器甕や舟形木製品では文様や調整痕を注意深く観察して実測した。(西川朗聖)



SE04出土木製品 (一針C遺跡)



舟材転用井戸枠の実測 (一針C遺跡)



土器の記名・分類・接合 (高堂二反田遺跡)



木器の分類・接合 (高堂二反田遺跡)



屋外での分類・接合（中ノ江遺跡）



屋内での分類・接合（中ノ江遺跡）



瓦の接合（金沢城跡）



石器の記名・分類・接合（宅田上野山遺跡）



舟形木製品の実測（庄・西島遺跡）



大型須恵器甕の実測（庄・西島遺跡）

県関係調査グループ

令和7年度は、観法寺ヤッタ遺跡1・2次(金沢市 平成30年度、令和2年度調査)、観法寺墳墓群1・2次(金沢市 令和3・4年度調査)、観法寺ジンヤマ横穴(金沢市 令和3年度調査)、庄・西島遺跡、津波倉廃寺(加賀市 平成30年度調査)、酒井バンドウマエ遺跡(羽咋市 平成30年度調査)の整理作業を行った。

観法寺ヤッタ遺跡1次では、令和5年度に整理した瓦の実測・トレース作業を行った。着手前に担当調査員から瓦の作り方や実測をする際の注意点等の説明を受け、作業を始めた。この遺跡の瓦は大きく厚みがあり、溶着物が付着したものが少なくなかったことから、拓本を取るのに時間がかかった。

同遺跡2次では、木製品の分類・接合、土器等の記名・分類・接合作業を行った。木製品は曲物の側板、底板、棒状木製品が多数を占めた。土器は土師器皿が多く、破片が細かく器壁も薄かったことから、接合に時間がかかった。瓦も多く出土していたが、1次調査出土資料のように溶着物が付着しているものは少なかった。このほか、製塩土器や縄文土器、多口壺と思われる土器片、金属製品は銅製容器や鍋と思われる破片が見られた。

観法寺墳墓群1・2次、観法寺ジンヤマ横穴では、記名・分類・接合を行った。観法寺墳墓群では器形の類似した土師器甕が多く出土しており、破片を見分けるのに苦戦した。同墳墓群ではこのほか、骨壺やその蓋などの土器が、また石製品では碧玉や管玉、ガラス玉も数点見られた。

なお同遺跡では平成14年度にその範囲確認を目的とした試掘調査が実施されている。その内容については同17年に報告書が刊行となっているが、当時の出土遺物との接合を確認したところ、報告資料と接合する土器片も見つかった。

庄・西島遺跡、津波倉廃寺では、令和5年度に分類・接合した土器、石器、金属、銅銭、瓦の実測・トレースを行った。内外面ともに調整の残りがいい長胴甕や把手のついた甑、須恵器の蓋や円面硯、墨書のある坏、管玉、石鏃、瓦、



土器の接合(観法寺ヤッタ遺跡)



土器の接合(観法寺墳墓群)



平成14年度調査出土資料との接合(観法寺墳墓群)

土製品の土馬など865点が対象である。かまどの一部とみられる破片が多く出土したことから、金沢市大場遺跡出土のかまど復元資料を参考に、担当調査員とともに部位を特定の上、実測・トレースを行った。

令和7年度の最後は、酒井バンドウマエ遺跡の木製品の分類・接合、及び土器、石器、金属の記名・分類・接合から実測・トレースまでを行った。木製品は柱根がほとんどで、他に曲物の底板や、長さが約140cmの櫓、180cmを測る板材などもあった。土器では縄文の深鉢の破片が多く、どれも同じような条痕文様が施されていて、いったい何個体あるんだろう？と頭を悩ませた。また弥生後期の壺や漆の付いた須恵器の坏、赤彩の埴、製塩土器や小さくてもハケ調整がびっしり残る土師器の壺や甕、石鏃の未成品など、実測・トレースをてこずらせるものが多かった。

令和7年度下半期は期限ギリギリになりそうで、土器の補強や実測図のスキャンなど、他グループのみなさん大変お世話になりました。ありがとうございました。（土生久美子・北 寿栄）



土器の実測（庄・西島遺跡、津波倉廃寺）



縄文土器（酒井バンドウマエ遺跡）



弥生土器（酒井バンドウマエ遺跡）



柱根の実測（酒井バンドウマエ遺跡）



土器の実測（酒井バンドウマエ遺跡）

特定事業調査グループ

令和7年度上半期は矢田遺跡（七尾市 令和4・5年度調査）の整理作業を行った。先ず令和4年度調査の金属、石器、同5年度調査の大型木製品の実測・トレース作業を行った。鉄滓、石鏃、石錐、スクレイパー、打製石斧、磨製石斧、軽石、砥石、紡錘車、飾り弓、扉、梯子、梁桁材、柱、直柄鋏などがあった。

続いて令和5年度調査の記名・分類・接合作業を行った。遺物は古墳時代の土師器の甕、高坏、壺などが圧倒的に多かった。須恵器では、甕、高坏、坏、平瓶、横瓶などがあり、陶器製で精巧な作りの物が割と多く見られた。弥生の壺、器台なども数点有った。また移動式のかまどの破片は複数の個体があると思われ、形を推定しながらの難しい接合作業になった。



飾り弓の実測（矢田遺跡）



須恵器（矢田遺跡）



土師器甕（矢田遺跡）



土器の接合（矢田遺跡）

下半期は、倉垣遺跡（志賀町 令和4・5年度調査）、古府シマ遺跡（小松市 平成30年度調査）、大場遺跡（金沢市 令和4・5年度調査）の整理作業を行った。

倉垣遺跡では、令和5年度調査分の記名・分類・接合と、令和4・5年度調査の土器、石器の実測・トレース作業を行った。甕、壺、高坏、器台、手づくね、かまど、軽石、砥石、たたき石、打製石斧、勾玉などがあり、珍しい物では、直径4.95cmの鏡形土製品があった。

古府シマ遺跡では、木製品の分類・接合作業、土器、木製品の実測・トレース作業を行った。土器は土師器の皿が多く、白磁、青磁、須恵器甕の転用硯、中世須恵器の鉢などもあった。木製品は130

～150cmの井戸杵縦板、横棧、漆器椀、手押し木、箕の杵木、下駄、底が2重になった曲物などがあった。

大場遺跡は、土器、木製品、金属、石器の実測・トレース作業を行った。木製品では当初、器種不明だった階段状のものは、自在鉤の転用杭であると分かった。また、中でもかまどの実測は、4面プラス断面2ヶ所と大変な作業となった。

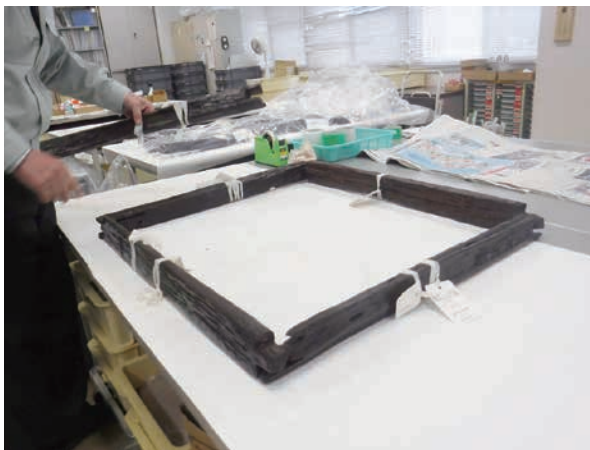
(下村 薫)



土器の実測（倉垣遺跡）



鏡形土製品（倉垣遺跡）



木製品の分類・接合（古府シマ遺跡）



実測図トレース（古府シマ遺跡）



石器の実測（大場遺跡）



かまどの実測（大場遺跡）

横穴式木室と石室の結節点 —加賀市三木5号墳の切石石材—

正田悠馬

はじめに

石川県南加賀地域における横穴式石室の特質として、在地の凝灰岩を加工した「切石」^{註1}石材の使用が挙げられる。越前の福井県あわら市神奈備山古墳(TK10型式期)での全面的な採用から、能美市西山古墳群など南加賀への導入を踏まえ、両地域の交流・影響関係を説く考えが根強い。近年、加賀市南部に所在する三木5号墳が発見され、木材で玄室構造を構築する横穴式木室でありながら、一部に切石石材が確認されたことが注目された。

本稿では三木5号墳の切石石材に関する基礎研究として、関連する横穴式古墳と玄門部および石材架構法を中心に比較しながら整理を行う。

1. 三木5号墳と南加賀の横穴式木室

三木5号墳の概要

三木5号墳は林道開削を契機とする不時発見により確認された古墳であり、墳丘の半壊とともに埋葬施設も一部破壊を受けている。2016年に加賀市教育委員会が確認調査を行い、調査成果が報告されている(戸根2018)。現況地形から墳丘径11.6mの円墳と推定されており、加賀市山中から福井県境にて日本海へ流れる大聖寺川を眼下に望み、越前や江沼平野との交通に利便性の高い地形に立地する。

玄室規模は残存した部分で長さ3.2m×幅2.3mをはかる。内傾する粘土壁が長辺を中心として全体的に確認されたことから、断面が三角形の合掌形を呈する横穴式木室であることが把握されている(図1)。玄室内に明確な木柱穴や板材の痕跡は確認されていないが、主軸上に2本の支柱を立てて両側から板材を立てかけたタイプと推測される。本古墳を特徴付ける切石石材は、南側の2段4石と北側の奥壁西側の1段分1石が原位置を保った状態で出土し、この4石に伴うであろう5石が南西隅に倒れた状態で出土した。そのほかに玄室の東辺奥側や中央、西辺中央の付近で石材が確認されているが、原位置であるかの判断は保留されている。南側東隅の切石積が無い部分には閉塞石とみられる塊石が積まれていることから、報告では切石積について南壁を構築する石材と捉え、塊石の位置から右片袖(奥壁からみて)と想定している。さらに原位置を保つ南壁の4石と倒れた5石の積み方について復元案が提示されており、袖部における玄室高が1.1mほどであったことから高さ1.1mほどの三角形を指向した切石積であったと想定される。玄室の想定断面と歩調を合わせていることから、この復元案に特段の違和感はない。切石は加工痕が良好に残っているといい、能美市西山古墳群などの切石積横穴式石室と同様にチョウナなどの工具で全面が平坦に加工されている。小口面の一部に鉤状の切り欠けが施され、石材が組み合っていたと想定できることから、当地における切石積石室と同様の加工技術、構築志向がうかがえよう。また石材は直方体ながらやや偏平であり、後述するように西山古墳群の切石石材と類似する。

玄室内からは鉄鏃3点、須恵器坏蓋6点、坏身5点、埴2点、有蓋高坏、無蓋高坏、小型壺、提瓶、広口壺が出土している。須恵器はおおむねTK10型式並行期にあたるが、坏身や埴に古相を呈するものがあることから、築造・埋葬時期は6世紀初頭～中頃に収まる。南加賀における切石積みをも有

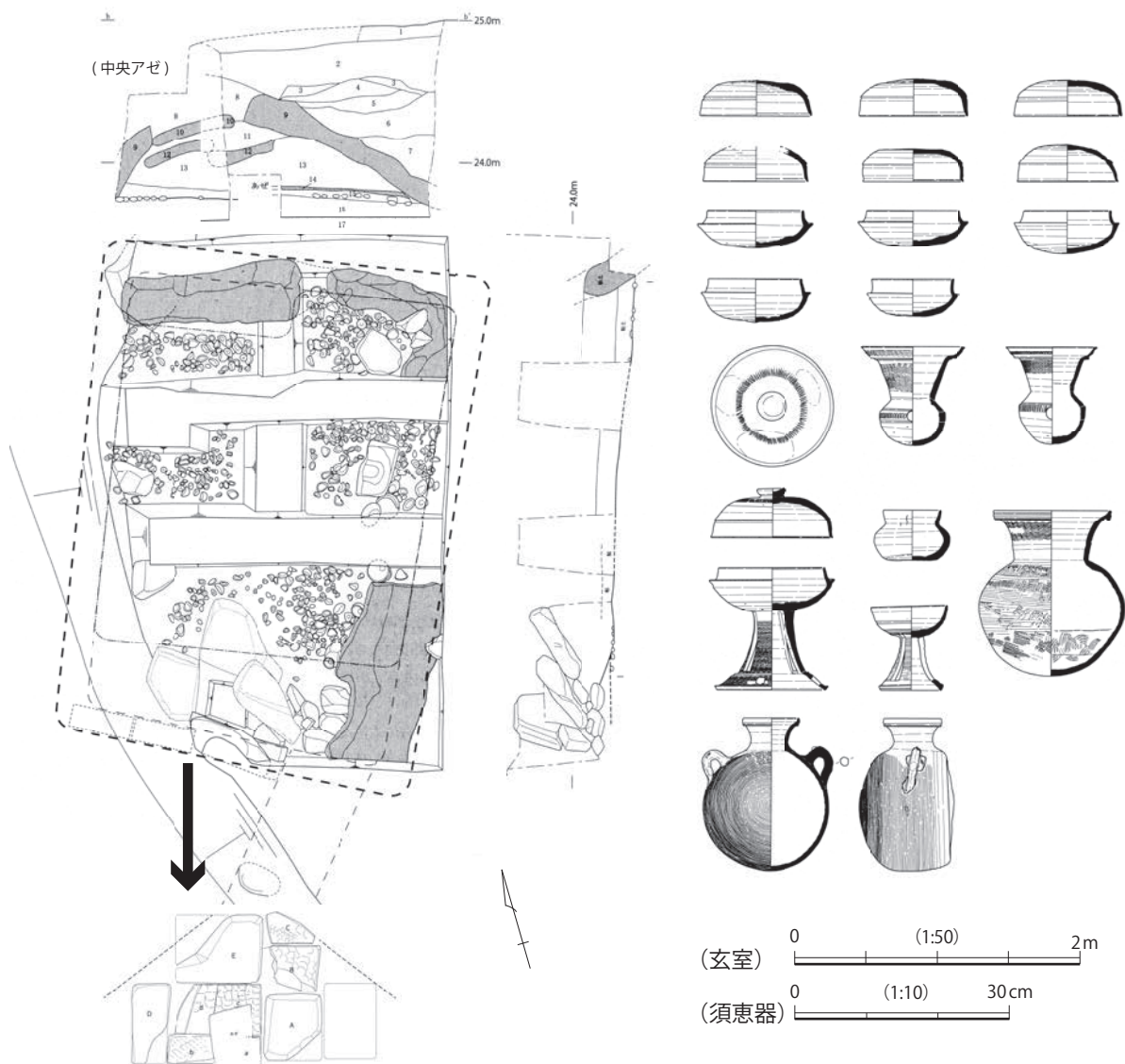


図1 三木5号墳平面図及び切石積み(復元)・玄室出土須恵器

する横穴系埋葬施設としては最古段階に位置する。また報告した戸根比呂子は横穴式木室と横穴式石室の折衷形と捉え、木室と切石積石室に情報共有や強固なつながりを持っていたと推測している(戸根2018)。

以上より三木5号墳については、横穴式木室を有すること、切石積を有することが大きな特徴としてあげられ、粘土とともに凝灰岩の切石が出土したとされる小松市矢田借屋8号墳の所見を彷彿とさせる(小松高校1961・1962)。

横穴式木室の研究略史

三木5号墳の呈する論点に言及する前に、南加賀における横穴式木室について研究史を確認したい。

南加賀の横穴式木室の調査・認識は全国的に早く、1950年代に遡る。上野与一らは当時開発の危険にさらされた遺跡や古墳の調査を行い、その中で小松市念仏林古墳の調査が行われた。直立する粘土壁を持つ構造物の内部に礫床が存在する、という観点から梅原末治や後藤守一らにより従来の粘土

槨とは一線を画す「礫床粘土槨」「礫床粘土被覆槨」の用語が提示されたことが紹介されている（作田1950）。その後、高堀勝喜は礫床の存在から粘土槨であると想定し「箱形粘土槨」を提唱した（高堀1951）。また上野与一はこうした粘土を用いた埋葬施設について早くに分類を行っており、A類（箱形粘土槨）として粘土による蓋構造があったと想定している（上野1952）。小松市矢田借屋古墳群など調査事例の増加に伴い、出現の背景については石材の入手性などの議論があるものの、当時の研究精度や類例数の限界により表出的な部分に留まる（高堀ほか1966・上野1952）。

以後、南加賀においては類例の増加が滞る中、1960年代以降に近畿地方や東海地方などで「カマド塚」や「横穴式木室」が発見され、その報告の中で「箱形粘土槨」との関連性が少なからず指摘がなされるなど研究が繰り広げられた。これを受けて北野博司は「箱形粘土槨」の再検討と両者の関連性について考察を行った（北野1983）。北野は槨とするには幅が広く、礫床、粘土壁の崩落状況から内部空間の存在を想定した。また横口部が想定しうる構造が確認できることや、追葬の有無について考察する必要性を指摘し、横穴式木室との関連性を想定した。南加賀における「箱形粘土槨」研究に新視角をもたらす画期となる研究であった。

その後、小松市埴田後山古墳群において木室内に柱穴跡が確認されたこと、また横口部が想定されることから研究は進展を迎えた。「室」構造との考えが広がりを見せ、調査を担当した樫田誠は「南加賀型木芯粘土室」を、河村好光は「木造粘土被覆室」と呼称した（樫田ほか1989・河村1997）。伊藤雅文は「箱形粘土槨」名称の再検討を行った（伊藤2008）。小松市ブッシュウジヤマ2号墳を例に断面が台形を呈する事例が存在する点から、木造の構造体である点や屋根の一部に粘土を使用しているのみであることを指摘し、木材で「室」を作ることを積極的に評価して「横穴式木室」と同様に呼称することが好ましいと提言した。現在では伊藤の提言が広く理解され、それまで「箱形粘土槨」と呼称された埋葬施設は「横穴式木室」と呼称されている。

以上のように近年まで名称に関する研究が主眼であった。これは現在においても南加賀では15～20例程度に留まる資料数の制約によるものであるほか、古い調査事例が多いことに起因し、基礎研究や型式学的な検討は少ない。汎列島的な横穴式木室研究においても、こうした研究の混乱から俎上に載るどころか本来同一に扱われる資料の取捨選択が行われる現状がある。

このような現状は南加賀における横穴式石室においても類似しており、横穴系埋葬施設として埋葬方法などの結節点を見出すことが今後の研究に関する試考を促す一手となろう。

問題の所在

三木5号墳の切石石材が提起する論点として、以下の項目が挙げられる。

①横穴系埋葬施設における切石石材の早い採用

初期横穴式石室をはじめとする地方における導入期（MT15～TK10型式期）までの横穴式石室は、腰石的な用法を除いて石材の小口積みあるいは平積みを基調とする。一方で南加賀では6世紀後半の西山古墳群などにおいて、チョウナなどによる削り加工を行い、直方体を成した切石石材の長側面を底面として側壁を構築している。石材の加工方法と用石技法としては三木5号墳の石材と酷似している他、石材の形状も類似しており、三木5号墳がこれらに先行することは南加賀における切石積横穴式石室の構築に影響を及ぼした可能性がある。

②横穴式木室における壁面（玄門部）への石材利用

横穴式木室は主に木材を骨組みとして、適宜粘土で壁面を補強する。これは玄門部においても同様である。後述するように、玄門部あるいは羨道に石積みを有する横穴式木室は列島内に散見できるが、

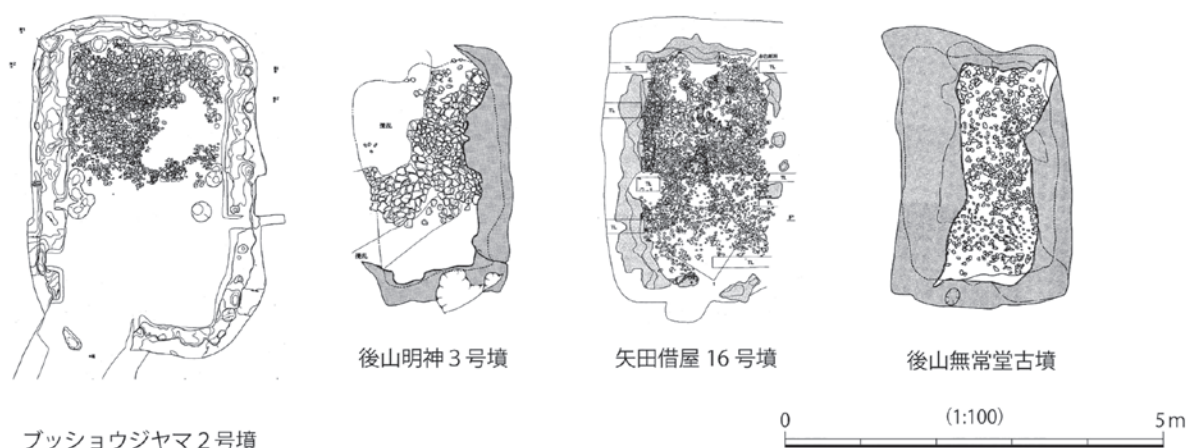


図2 南加賀の横穴式木室 (S=1/100)

時期・分布から隔たりは大きく、近隣の横穴式石室との比較が必要である。

三木5号墳に関する評価や論考は報告書内に留まっており、当地における横穴系埋葬施設に対する基礎的研究はその資料数の制約により不足している。以下、主に上記の論点を取り上げながら関連する古墳との検討から本墳における横穴式木室・横穴式石室からみた現在地を探りたい。

南加賀の横穴式木室

南加賀において横穴式木室は6世紀初頭(MT15型式期)を中心に15基程度(推測含む)が築造されており、その後に横穴式石室へ墓制が転換すると指摘されている(伊藤2008)。その分布は南加賀にまばらながらも、能美地域と江沼地域の間地点にあたる6世紀初頭から本格的に形成された三湖台古墳群を中心としており、加賀三湖(今江潟・木場潟・柴山潟)に囲まれた三湖台地の開発や南加賀古窯社群の生産活動と紐づいて築造された埋葬施設と推測される。

当地の横穴式木室は、築造時期に議論のあるブッシュウジヤマ2号墳(4本柱による断面台形)を除き、主軸上の奥壁側と開口部側に2本の主柱を立て、両側から板材を立てかけて断面が三角形となる合掌形を呈する形態が主となる(図2)。2本の主柱を用いる構造は、風間栄一が「東海型の横穴式木芯粘土室」と看破したA類中のA類2型、小森哲也の分類によるA1類に類似する(風間1993、小森2013)。これは遠江の明ヶ島古墳群など磐田原台地に顕著であり、一部丹波に存在する。しかし明ヶ島古墳群では側壁下部に多数の連なる木柱穴があり、木柱状の細木を配置して壁構造を成している。また時期は6世紀後葉を中心としているため時期的な隔たりが生じており、これらは基本的に側壁を多数の細木で構築する点で共通する「近畿型」(風間1993)との関係を考えたい。側壁に板材を用いる構造は遠江の三方ヶ原台地を中心としており、東海における初現期(MT15型式期)の瓦屋西B3号墳でも採用されている。主柱がなく、板材を用いて断面が方形を呈する立方体状の玄室を構築すると捉えられることから、やはり系譜は異なる。いずれにしろ2本の主柱と板材を用いた構造は南加賀のほかになく、地域的に限定された「南加賀型」とも呼称できる形態である。また壁体の一部に石材を用いる類例は現状確認されていない。

以上より、三木5号墳は「南加賀型」の横穴式木室を原型に、当地に特徴的な切石の一部採用を果たした事例として、横穴式石室の受容を捉える上で重要な事例と評価できる。

2. 北陸における横穴式石室との関係

次に三木5号墳の切石石材について、用石技法を中心に横穴式石室との比較を試みる。まず三木5号墳の築造以前～同時期の横穴式石室について、袖石や閉塞状況など玄門部の様相を概観し、次に以後の切石積横穴式石室との比較を行う。

初期・導入期横穴式石室の玄門部

北陸は本州島内で初期にあたる5世紀中葉頃に北部九州系石室が若狭で採用されたことが知られており、その後も九州系の要素が変容しつつも色濃く残る地域であると認められている。そのため玄門部には袖石として立柱石を立てて区画する事例が見受けられるほか、板石・木板による閉塞が確認されている。以下、若狭・越前の状況について確認しよう。

袖石に立柱石を用いるものとして、若狭の向山1号墳、西塚古墳、十善ノ森古墳、二子山3号墳、獅子塚古墳、輪蛸東古墳、きよしの3号墳があり、越前では確認されていない^{註2}。若狭ではその後、MT85型式期から畿内系要素が強まり立柱石による区画は廃れていくが、越前・能登で持続する。一方で袖部を多段積みで構築するものとしては、若狭の行峠古墳、上の山古墳、大飯神社1号墳などに加えて越前の椀貸山古墳、神奈備山古墳などがある。閉塞については前述の立柱石を用いた石室の多くで板石による閉塞が行われ、MT15型式期を境に木板+塊石による閉塞へと移行する。入江文敏は若狭における初期横穴式石室について、筑肥など玄界灘沿岸や有明海沿岸地域の特徴が認められることから直接的な影響を加味しつつも、それらの最大公約数的な採用の仕方と指摘する（入江2011・2020）。

三木5号墳は石材を縦に積み重ねるように一面の壁体を構築しつつも、複数の石材を組み合わせることから、板石のような一枚の石材としての意識は議論の深化が待たれる。その様子はむしろ石室の壁体に近似する。そこで切石石材の利用で南加賀との関係が取り沙汰される神奈備山古墳に着目し、南加賀の後出する横穴式石室についても確認する。

神奈備山古墳

福井県あわら市に所在する神奈備山古墳（図3-7）は全長59mをはかる北陸における後期最大の前方後円墳であり、越前一円を統べる大首長系列と目される横山古墳群において最終段階の首長墓とみなされることが多い（中司2001）。

石室は玄室長3.6m、幅2.6mの矩形を呈し、直方体を志向した加工石材（＝切石）^{註3}を全体的に使用して玄室および羨道を構築している（中司ほか1978）。玄室奥壁に2枚の板石が確認され、前代の椀貸山古墳と同様に石屋形を構成していたものと推定できることから、大局的に北部九州に淵源を辿ることが指摘されている。奥壁は一段目のみが残存しており、多石構成であることがわかる。両側壁は6段の多段積みで、基底部にやや大きめの石材を用いつつも明確な腰石的意識は感じられない。段毎に高さを合わせながら目地を通しつつも、複数箇所切組を用いて石材を積み上げている。なお小口面における切組は言及されていない。

袖石は両側に確認でき、三段目まで側壁や羨道部と目地が通るように積まれている。破壊を被っているため袖部での閉塞方法は不明であるが、板石閉塞の痕跡は確認されていない。また開口部に段を

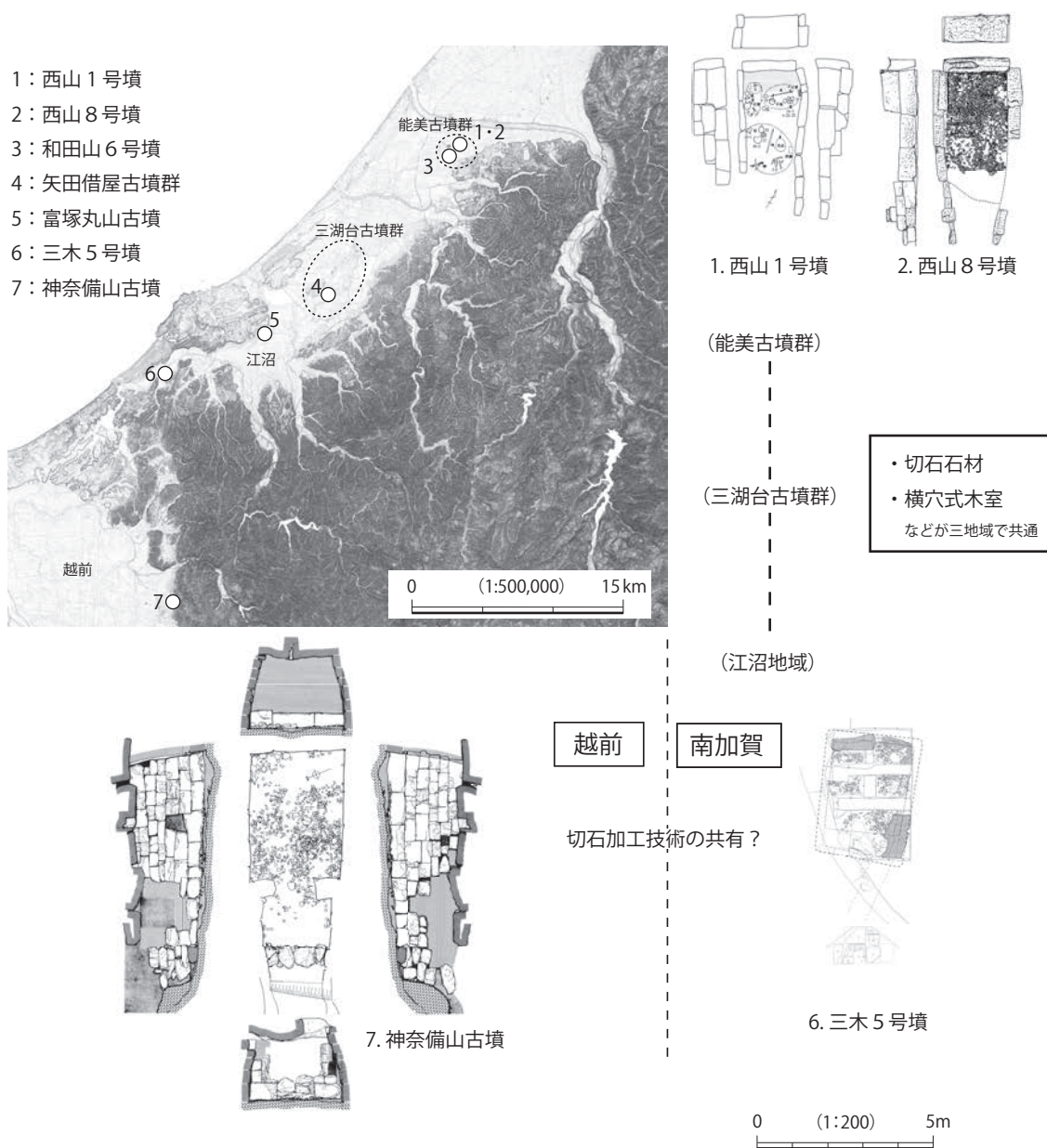


図3 南加賀・越前の切石石材をめぐる動向 (S=1/200)

有しており、段から一石を開けて閉塞石が積まれている。報告ではこの閉塞石が加工石材であると強調されているが、実測図を観察する限りでは上面と底面が平坦である以外は読み取れず、側壁などに使用された立方体を志向したものと異なる。しかし、無秩序な塊石積みでないことは注目されよう。すなわち加工石材の余分を使用したとも捉えられ、切石利用の意識が強い石室であったと推測できる。石材の詳細な形状について確認することは叶わないが、壁体に用いられたものにはやや扁平な形状の石材も確認できる。

南加賀の切石積横穴式石室

南加賀において切石積横穴式石室の初現は能美市和田山6号墳（TK10型式期）とされるが、古い調査事例であるとともに破壊を被っていることから、三木5号墳および神奈備山古墳との前後関係は焦点であり続ける。6世紀後半（TK43型式期）には、近隣の西山古墳群にて1・2・7・8・9号墳に切石積横穴式石室が確認されているほか、小松市の三湖台古墳群では複室構造とされる符津石山古墳がある。小松市中村古墳、同市矢崎B古墳なども切石積横穴式石室とされるが、古くに失われており詳細は不明である。終末期には小松市河田山12・33号墳、8世紀には横口式石槨の小松市那谷金比羅山古墳が築かれる（樫田ほか2020）。基本的には在地で採取される凝灰岩を用いていると考えられ、越前で採取される笏谷石（緑色凝灰岩）の利用は把握されていない。

比較的细节が明らかになっている西山1・8号墳の横穴式石室は、明確な袖石が確認されておらず、1号墳（図3-1）は矩形を呈するが8号墳（図3-2）は開口部へ徐々に狭まることから「徳利形」とも呼称される平面形を持つ（伊藤2015）。石材は基本的に直方体を成しており、前述したように三木5号墳と同様に最大面を玄室内へ向けるように長側面を底面としている。8号墳では右側壁の奥壁から一石目のみに2段目の石材が残存しているため、玄室内における石材の積み方は不明だが、1号墳では右側壁において奥側から1石目と2石目では段数がそれぞれ2段と3段であり、石材の大きさを変えながら高さを揃えている。玄室内から出土した須恵器はいずれもTK43型式並行であるが、伊藤は石材の大型化を加味し「1号墳よりも8号墳の方に新しい要素が認められると判断できよう」と指摘する（伊藤2015）。

三木5号墳では1段目で比較的大きな石材の高さを揃える意識が認められ、小さな石材は複数組み合わせ1段目の高さを合わせており、西山1号墳に親和性を覚える。また西山古墳群では玄室表面に見えるL字状の切欠の他に、小口面に切欠が存在する。三木5号墳の切欠と同様の加工であり、これらの構築手法は同一の意識を有していると判断できる。

以上より三木5号墳の石材構築に現状最も近いのは西山古墳群と考えられる。比較検討できる資料として双方ともに貴重な事例であり、詳細な検討が待たれる。ただ前述したように南加賀において消滅した切石積横穴式石室は多く、必ずしも彼我の直接的な関係性を首肯するものではない。

小結

以上より、三木5号墳の切石積みは横穴式石室の玄門部をトレースしたものとは現状考えられず、切石石材は西山古墳群と類似すると判断された。しかし神奈備山古墳の石材にもやや扁平な石材が用いられていることから、両者の用石法に関してはさらなる検討が求められる。

さて、神奈備山古墳と西山古墳群の切石石材について詳細な検討を行った伊藤雅文は、双方に細かな差異が多いと注意しつつも、同じ凝灰岩を用いた墓制であることを重視して同じ技術系譜にあると捉えている（伊藤2015）。また石室以前の石棺との関係に着目し、南加賀では石室石材に細かな加工が認められない点、越前では石棺に用いられた笏谷石が採用されなくなる点から、双方ともに石棺構築技術との関連性に否定的である。積方技法と石材の縦横比を基に南加賀と越前の切石積石室について詳細に分析した村上昂之は、両地域に複数の技術系譜が存在することを確認し、大きく6世紀と7世紀にそれぞれ画期が認められることを指摘した（村上2025）。また両地域間では構築技法に大きく開きがあり、直接的な繋がりを認めていないが、南加賀内における技術の近似性を確認している。筆者の検討結果は村上の指摘に類するものだが、横穴式木室における石材の利用を考える上では、立地上から越前との関係を大枠で捉える必要があり、凝灰岩自体の利用に着目する伊藤の指摘は頷ける。

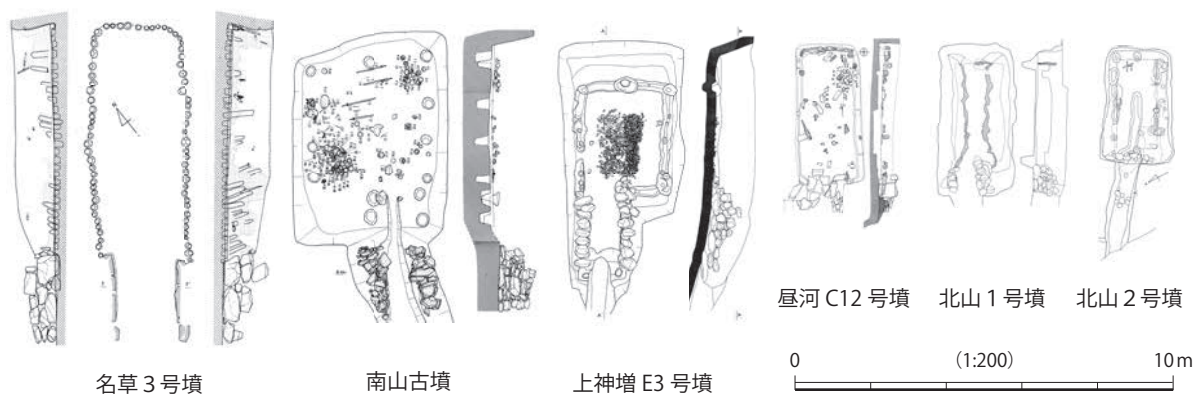


図4 石組みを持つ横穴式木室 (S=1/200)

3. 石材を用いる横穴式木室

横穴式木室における石材の利用は、一般的に玄室部の床石や礫床、排水溝などの小型石材の使用に留まる場合が多いほか、閉塞用として塊石の利用が多い。三木5号墳のように加工石材を用いる事例は管見では稀少だが、田村隆太郎が指摘したように羨道・墓道部の壁材として石積みを構築する事例が一定数存在する(図4、田村2010)。

羨道部に石積みを施す例として三重県南山古墳、昼河C12号墳、静岡県上神増E3号墳、兵庫県名草3号墳がある(皇學館大学1982、岩中1993、大谷・田村2011、森下・宮原1984)。いずれも横穴式石室における羨道部の石積みと類似しており、付近の石室と同様に在地の石材を使用していることが報告にて指摘されている。静岡県北山古墳群(1～3号墳)と屋敷山1号墳(南木室)においても羨道部を構築するような石積みがあるが、玄門部から墓壙内に留まる短小なものであり、前者とやや様相は異なる(柴田1987・2011)。墓壙が玄室に比して大きいもの、同程度であるものに依るという事情はあるが、墓壙内に石積みを有する事例(上神増E3号墳含む)は天竜川東岸から原野谷川流域の中遠江～東遠江に収まる範囲にあることは在地色の強い木室形態との関連が伺われる。

群集墳中の例は古墳群内に同じく横穴式木室を内包する古墳が築造されているが、北山古墳群を除いて継続しないことから、それぞれの古墳群中においては特殊な事例であると認識できる。

また築造時期を鑑みると、南山古墳が6世紀前半と先行し、屋敷山1号墳が6世紀中葉、北山古墳群・上神増E3号墳が6世紀後葉、名草3号墳が6世紀末頃であり、時期的にもズレが生じている。石積みも小地域ごとに類似性は認められるものの、全体的には使用石材の大小、積み方には差異が生じている。田村は横穴式石室との関連性を念頭に置きつつ、横穴式木室自体が様々な影響下で変容していることから、「入口構造の側壁に石積みを用いるという横穴式石室の影響についても、まばらで多様な受容であった」とする(田村2010)。三木5号墳もまさに越前・南加賀の要素を基に構築された事例であると言えよう。さらに横穴式木室における比較的大きな石材の利用が玄門部から羨道部にかけてであることは注目でき、利用の背景に迫る必要がある。その意図を巡っては横穴式木室の分析だけでは限界があり、墓制間の交通に視野を広げるべきであろう。

4. 横穴式木室と石材の結節点 南加賀における切石石材の利用

南加賀に採用された切石石材の技術については、その系譜を中期後半に築かれた加賀市狐山古墳の箱式石棺に求める立場（伊与部1989、河村1997、村上2025）と慎重な立場（伊藤2015）に分かれるが、おそらくそれぞれの祖型を求める認識のレベルが異なり、前者は石材加工の前提が既に行われていた点に着目し、後者は石室構築全体を見渡して前代との造墓に伴う構造的な差異に注意を払っている。このような中、6世紀前半に江沼地域において切石石材が採用された事実はその関係に再考を促す。しかし南加賀において当該期以前の石棺が狐山古墳など少数である点など課題は多岐にわたる。

また三木5号墳の切石石材がおおむね一辺のみに留まることから、横穴式木室の築造意識が高く、完全な折衷形とは断定しがたい。ただ石材の流通により利用したのではなく、玄門部に設置されている点に意図を見い出したい。次に玄門部に石積みを有する埋葬施設について言及したい。



図5 墓前域石積・羨門切石組を持つ横穴墓

玄門部石積みの意義

横穴式木室で玄門部付近に石積みを有する事例が散見されることは既に述べた通りだが、その意図はどこにあったのか。木室における石積み事例は羨道部に多いことから、塊石による閉塞を行えば見た目としては石室の閉塞状況と類似する。三木5号墳においては墓道・羨道となる部分は破壊により不明であり、復元想定図は塊石部分と外部の石材をつなぎ合わせた結果である。その場合、閉塞状況は塊石のみが露出する状況である。仮に墓道部分がさらに広く、南壁が露出していた場合、面取りがなされた石積みが合掌形を呈して佇むというあまり見慣れない光景が思い浮かぶ。しかし石材の存在感は強調できよう。

憶測として、横穴墓における横穴式石室との交通に着目したい。南関東の西相模から多摩を中心として、横穴墓の墓前域に石積みを有する事例が確認されている。柏木善治は西相模地域から多摩地域に分布圏を持つ「墓前域石積」について、A類：長い羨道の側面にあるもの、B類：墓前域奥側の壁のみにあるもの、C類：墓前域奥側と羨道にあるものと大別し、6世紀末から7世紀後半にかけてA類からC類への推移を示している（柏木2001）。また類似するものとして、多摩川下流域左岸を中心に分布する、羨門を切石で構築する事例を紹介しており、羨門切石に墓前域石積が付加されている事例も確認できる^{註4}（図5）。柏木は墓前域石積の正面観から、横穴式石室と同じような視覚効果を生み出したとみなし、墓前域における儀礼との結びついた舞台装置であると指摘する（柏木2013）。相模地域における唯一の切石積石室である大磯町釜口古墳はその規格が近隣の横穴墓に類似することから強い関連性を指摘されている（池上2000・立花2007）。当地において横穴墓と横穴式石室が密接な関係にあったことは想像に容易く、施工思想の共有は図られやすいものと推察できる^{註5}。

三木5号墳に横穴式石室との接触があったことが予想されることは前述の通りであり、横穴墓と同

様に横穴式石室のような視覚効果が志向されたという解釈も若干は許されたい。ただそれ以前は粘土槨や木棺直葬が普遍的な埋葬施設であった当地においては石積み自体が希有な構築物であり、理解には遠く及ばなかった可能性がある。周辺には一部川原石積横穴式石室も存在したため、横穴式木室という形態に強く固執したと考える方がよいだろう。あるいは被葬者が内部から見ることを意識したか。この場合には閉塞に関する内的効果が期待されよう。三木5号墳の切石積みは、横穴式石室の導入期における情報の錯綜を示す一端であると推測したい。

結語

以上、三木5号墳の切石石材を巡り、近隣の横穴式石室・横穴式木室および玄門部に石材を有する横穴系埋葬施設との検討を行った結果、南加賀に特徴的な形態の横穴式木室であること、石材は南加賀における切石積横穴式石室との類似性がみられること、他地域の石材を用いる横穴式木室とやや毛色が異なること、玄門部は横穴式石室と直接の繋がりが見出せず変容した結果と考えられることなどを確認した。

本稿では関連古墳との比較検討を優先したため、石材自体についての確認を怠っている。切石石材の類似性のみでなく、加工工具や工人の癖まで迫ることで加工技術から関連古墳について有機的な関係が見出せるだろう。今後の課題とし、他日を期したい。

三木5号墳の付近に所在する切石石材を持つ古墳として、富塚丸山古墳がある^{註6}。6世紀前半頃の築造時期が想定されており、江沼地域における盟主墳との関係は課題の一つである。また越前から北加賀まで地形的な制約から直線的に広がる南加賀地域にのみ切石石材が留まる点は、今後他地域における加工石材の動向との比較検討から地域的な特性を見出す必要があるだろう。

謝辞

本稿を作成するにあたり、以下の方々にご協力・ご助言を賜った。記して感謝申し上げます。

伊藤雅文、小林孝秀、佐藤佑吏、高久健二、戸根比呂子、富田樹、村上昂之(五十音・敬称略)

^{註1} 横穴式石室の壁体に切石石材を利用する地域として畿内、山陰、関東地方などが知られるが、畿内とその他の地域では実態や認識が異なる。主に使用石材の差異に起因する加工技術により、硬質石材を用いる畿内ではコタタキなどの工具で敲打を、その他の地域では凝灰岩などの軟質石材にチョウナや鑿などによる削り加工を用いる。いずれも表面を平滑に加工する点で切石との総称が定着している。本稿では村上昂之の「石材同士が接触する面、及び玄室内面にあたる部分を工具により平滑に整えた方形を基調とする石材」とする定義に従い、切石石材の語を用いる(村上2025)。

^{註2} 越前では鳥越山第二主体部が堅穴系横口式石室と指摘されており、天井部などの状況から向山1号墳と類似することが想定されているが、内部は未調査のため石室構造などは不明である(松井政信ほか2005『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳』松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会)。向山1号墳と同様の構造であれば袖部における立柱石の使用も見込まれよう。

^{註3} 報告では黄色みがかった凝灰岩であるとし、当地で石棺に用いられた笏谷石ではないと指摘している(中司ほか1978)。調査・報告した中司照代氏は後年、この凝灰岩について越前中央部ではあまり産出しないと、加賀地域に近い越前北方域からの採出を推測している(中司2001)。

^{註4} 石積みだけが構築されたもののほかに、多摩ニュータウンNo.313遺跡1号横穴墓など粘性の強い土を補填して強度の増加を図る事例も存在する(川島ほか2003)。

註5 横穴式石室と横穴墓の関係が言及されるものには、他に出雲の意宇型横穴墓がある。出雲に特徴的な石棺式石室との類似が指摘されており、玄門部は削り抜き玄門を模したような構造を持つ。石棺式石室との墓制的な規制に基づく考え（出雲考古学研究会1987『石棺式石室の研究』）や、被葬者層による任意の模倣とする考えがある（大谷晃二2019「出雲地方の横穴式石室・石棺・横穴墓の諸形態とその評価」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター）。間接的な影響を捉える場合には、伝聞あるいは模倣、空似といったバリエーションを考慮した上で、それぞれの実体的な動向や動機の把握を目的とした検討が必要となるだろう。

註6 加賀市に所在する富塚丸山古墳は墳形・規模が不明ながら、範囲確認調査により径65mの円墳または前方後円墳と推定されている、江沼地域における大型墳である（田嶋正和1997「加賀市富塚丸山古墳範囲確認調査」『石川考古』第241号 石川考古学研究会）。主体部は江戸後期に一度暴かれており、「石槨」から甲冑や太刀などが掘り出され、埋め戻されている。明治期に再発掘が行われ、その際に掘り起こされた石材が墳頂に残存している。早くから切石加工を施された凝灰岩を用いた横穴式石室または石棺であったと推測されている（田嶋明人ほか1978『江沼古墳群分布調査報告』石川考古学研究会）。年代等は不明であるが、石槨とする立場では5世紀中葉後半とされており（山本弘・田嶋正和2005『図説 かたやまづの歴史』片山津町）、横穴式石室であれば分布・立地等から6世紀前半頃だろうか。

現地で石材を観察したところ、おおむね凝灰岩と思われ、多くに切石加工がされていることを確認した。南加賀では竖穴式石槨に類するものは確認されておらず、石材の大きさや数からは横穴式石室を想定したい。

参考文献

- 池上悟2000「南井戸窪横穴墓群実測調査報告」『大磯町史研究』7 大磯町
- 伊藤雅文2008「横穴式石室の受容と展開」『古墳時代の王権と地域社会』学生社
- 伊藤雅文2015「凝灰岩切石積横穴式石室の一例」『河上邦彦先生古希記念献呈論文集』河上邦彦先生古希記念会
- 入江文敏2011「若狭地方における広域首長墳の動態—主体部・副葬品の分析をとおして—」『若狭・越古墳時代の研究』学生社
- 入江2020「若狭・越における横穴式石室の導入と展開 —若狭・越前を中心にして—」土生田純之編『横穴式石室の研究』同成社
- 伊与部倫夫1989「北陸地方の横穴式石室」『古文化談叢』20九州古文化研究会
- 岩中淳之1993『昼河古墳群』伊勢市教育委員会
- 岩本信一2006『小松市内遺跡発掘調査報告Ⅱ』小松市教育委員会
- 上野与一1952「南加賀に於ける粘土材使用の古墳に就いて」『石川考古学研究会会誌』第4号石川考古学研究会
- 上野与一1954「石川県に於ける古代文化圏への仮説—特に古墳内部構造より見たる能登と加賀の対比—」『石川考古学研究会会誌』第6号 石川考古学研究会
- 大谷宏治・田村隆太郎2010『合代島丘陵の古墳群』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 小黑智久2020「コシの横穴系埋葬施設と高志国」土生田純之編『横穴式石室の研究』同成社
- 垣内光次郎・菅野美香子2001『小松市ブッシュヤマ古墳群』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 風間栄一1993「横穴式木芯粘土室の再検討」『史観』第128冊 早稲田大学史学会
- 樫田誠・三浦純夫・村上昂之 2020「第5章 前方後円墳の時代—能美と江沼と三湖台—」新修小松市史編纂委員会編『新修 小松市史』資料編17 考古 石川県小松市

樫田誠・宮下幸夫ほか1989『後山無常堂古墳・後山明神3号墳発掘調査報告書』小松市教育委員会
 柏木善治2001「横穴墓の研究(7)県央地域」古墳時代研究プロジェクトチーム編『研究紀要』6
 (財)かながわ考古学財団
 柏木善治2013「古墳時代後・終末期の喪葬観念－相模・南武蔵地域における横穴墓の様相を中心として－」
 『考古学研究』60-1 考古学研究会
 川島雅人・大西雅也2003『多摩ニュータウン遺跡—No.313 遺跡—』東京都埋蔵文化財センター
 河村好光1997「棺・槨から室へ」(吉岡・河村1997に所収)
 北野博司1983「箱形粘土槨と横穴式木室との関連性について」『北陸の考古学』石川考古学研究会
 皇學館大学考古学研究会1982『南山古墳発掘調査』伊勢市教育委員会
 小松高校地歴クラブ1961「今夏の発掘」『石川考古』No.10 石川考古学研究会
 小松高校地歴クラブ1962「借屋八号墳発掘調査」『石川県高等学校文化連盟郷土部会報』2号
 小森哲哉2013「横穴式木室考」『考古学雑誌』第97巻第4号 日本考古学会
 作田公1950「念仏林古墳調査後記」『石川考古学研究会会誌』第2号 石川考古学研究会
 柴田稔1987『北山遺跡』浅羽町教育委員会
 柴田稔2011「磐田市屋敷山古墳群 権現山古墳群 発掘調査報告」『静岡県の前方後円墳』静岡県教育委員会
 高堀勝喜1951「古墳調査余記」『石川考古学研究会会誌』第4号 石川考古学研究会
 高堀勝喜・吉岡康暢1966「古墳文化の地域的特色—北陸—」『日本の考古学』Ⅳ 河出書房新社
 立花実2007「相模の後期古墳と横穴墓」広瀬和雄ほか編『季刊考古学別冊15 武蔵と相模の古墳』雄山閣
 田村隆太郎2010「上神増 E3号墳の横穴式木室について」(大谷・田村2010に所収)
 戸根比呂子2018『三木古墳群確認調査報告書』加賀市教育委員会
 中司照世2001「梶貸山・神奈備山両古墳と横山古墳群」『福井県立博物館紀要』8 福井県立博物館
 中司照世ほか1978「神奈備山古墳」『重要遺跡緊急確認調査報告』(Ⅰ) 福井県教育委員会
 村上昂之2025「南加賀・越前における切石積横穴式石室の構築技法－積方技法と石材縦横比を中心に－」『学究
 無限』吉岡康暢先生卒寿記念論集刊行会
 森下大輔・宮原文隆1984『名草3号墳・4号墳』加東郡教育委員会
 吉岡康暢・河村好光1997『加賀 能美古墳群』寺井町教育委員会

図版出典

- 図1. 三木5号墳：戸根2018に一部追記
 図2. ブッシュウジヤマ2号墳：垣内ほか2001、後山明神3号墳・後山無常堂古墳：樫田ほか1989
 矢田借屋16号墳：岩本2006
 図3. 神奈備山古墳：中司ほか1978、西山1号墳・8号墳：吉岡ほか1997、三木5号墳：戸根前掲
 図4. 名草3号墳：森下ほか1984、南山古墳：皇學館大学1982、昼河C12号墳：岩中1993、
 上神増E3号墳：大谷ほか2010、北山1号墳・2号墳：柴田1987
 図5. 多摩ニュータウンNo.313遺跡：川島ほか2003を一部改変

能美市・小松市高堂遺跡出土の未報告資料

正田悠馬・鈴木静華

1 はじめに

能美市大長野町・小松市高堂町に所在する高堂遺跡は弥生時代から中世にかけての複合遺跡であり、特に古代における掘立柱建物群の検出、「金光明最勝王経」木簡や墨書土器の出土が特色として知られる（第1図）。近年、（公財）石川県埋蔵文化財センターによって、近隣に所在する高堂二反田遺跡や中ノ江遺跡の発掘調査が行われており、一帯の考古学的知見が得られている。

さて当センターで整理中の金沢市大場遺跡からは、ほぼ全形を復元できる古墳時代中期後半の所産とみられる移動式竈^{註1}が出土している。また、そのほかの整理中の遺跡からも移動式竈の破片の出土が確認された。県内において移動式竈は能登地域に顕著であるが、加賀地域の報告例が少なく資料数の増加が待たれる中で、出土事例が増加しつつある。

本稿では、このような背景の中で把握された高堂遺跡の未報告資料を資料化することを目的として、当センターが保管する同遺跡の未報告資料を一部紹介する。

2 高堂遺跡の概要

高堂遺跡の概要について触れたい（戸澗・湯尻編1990）。高堂遺跡は、昭和54年（1979）から同56年（1981）にかけて三次にわたり、石川県立埋蔵文化財センターが一般国道8号（金沢西バイパス）の改築に先立ち発掘調査を行った。遺跡の年代は主に弥生時代後期～古墳時代前期と古代に分かれ、前者では布掘立柱建物5棟、平地式建物1棟、方形周溝墓状遺構の他、溝や土坑を検出し、弥生時代後期



第1図 高堂遺跡位置図



第2図 高堂遺跡平面図 (S=1/1000)・1号溝遺物出土状況図 (S=1/60)

から終末期にかけての土器が多数出土している。

後者では9世紀後半から10世紀初頭頃と推定される20棟の掘立柱建物群や溝、皇朝十二銭を約70枚埋納した土坑などを検出した。加えて北側の掘立柱建物群は「コ」の字状に配置され、南北に流れる1号溝からは約180点の墨書土器や前述の木簡が出土したことから、能美郡衙に比定されている中ノ庄遺跡や寺院に関連する性格であると目されている。今回報告する資料は調査区の中央を南北にかつ直線的に縦断する1号溝から出土している（第2図）。

3 高堂遺跡の未報告資料

今回、移動式竈片25点、不明土製品（土馬か）1点、縄文土器1点を資料化した（第3-5図、第1表）。以下、詳細を述べる。

〔移動式竈〕

移動式竈は胎土、色調、焼成から3個体以上の存在が推定される。

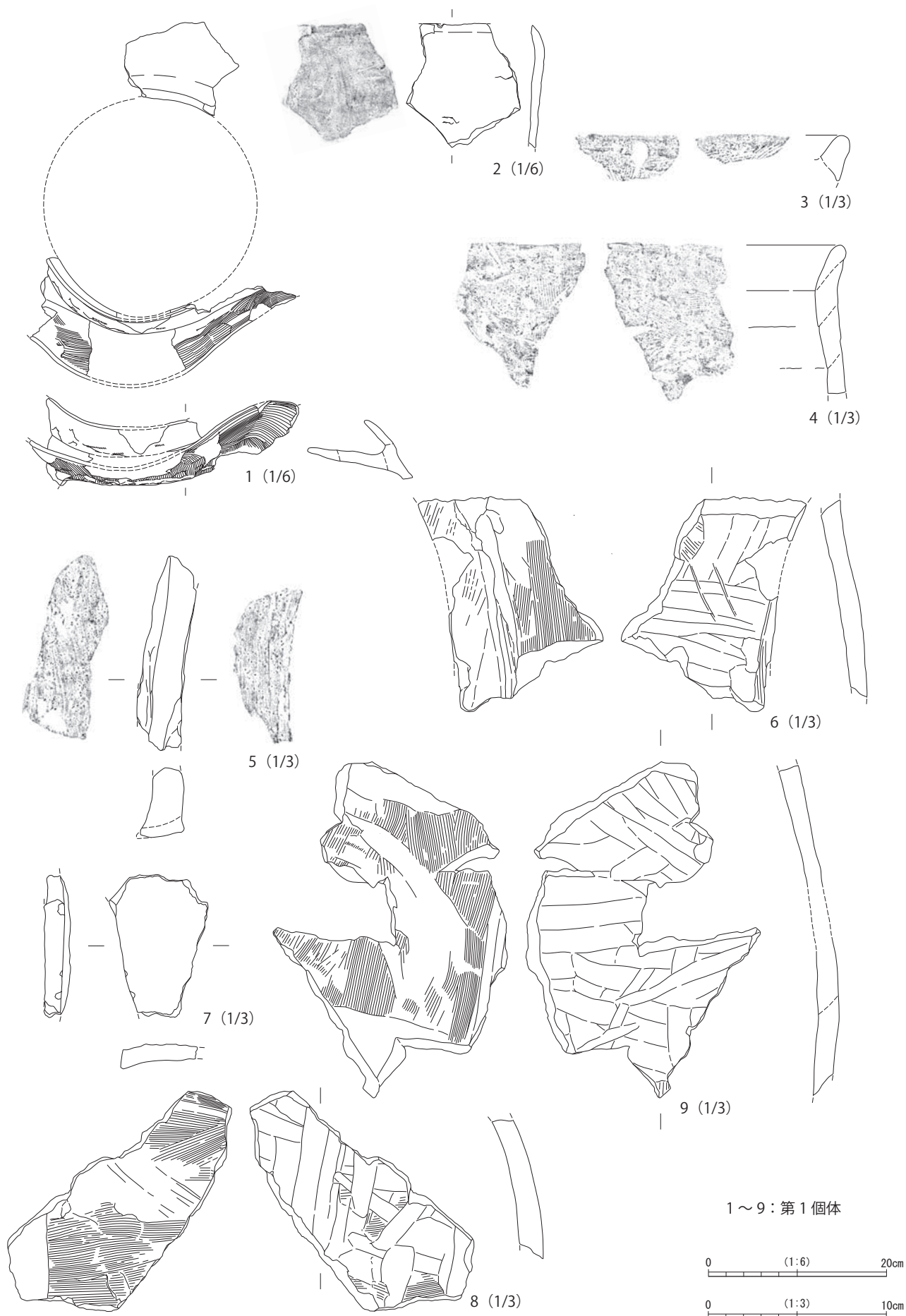
第1個体としたのは、1～9である。それぞれの資料に共通する特徴として、焼成が非常に良好で器壁が比較的薄く、明るい橙色の色調を呈する点が挙げられる。口縁の復元径は約24cmを測る。掛口はくの字状を呈し、口縁部端面はナデによりややシャープに仕上げられている。ひさし部は粘土帯貼付によって焚口を全周するように成形されており、幅約8cmと幅広である。全体的にゆがみが大きくひさしがほぼ水平に突き出していることがわかる。上下ともにハケ・ナデ調整で、端面はナデにより丸く仕上げられている。焚口開口部には工具痕が残り、体部を輪積み成形後に刀子のような鋭利な工具で粘土を切り取ったものと推測される。体部外面はハケ調整を基調とし、内面はハケのちナデ調整を主体とするが、一部に接合痕が残されている。

第2個体としたのは、10～16である。それぞれの資料に共通する特徴として、焼成が甘く、胎土に1～2mm前後の小礫を多く含み、器壁がやや厚く、にぶい橙～灰白色に近い色調を呈する点が挙げられる。掛口はやや屈曲の緩いくの字状を呈し、口縁部端面はナデにより面をもち、ケズリにより調整されている。ひさし部は粘土帯貼付によって成形されているが、底部焚口付近の小片では粘土帯剥離痕が確認できなかったことから、ひさしは焚口を全周しない可能性が高い。ひさし部上下ともにストロークの短い縦方向のハケ・ナデ調整で、端面の形状は欠損しているため不明である。ひさし下部や底部焚口付近で工具痕が確認できたことから、第1個体と同様に刀子状工具によって粘土を切り取ることで焚口を成形したものと推測される。底部片の一部には底面にケズリ痕跡がみられる部分もあり、整形後に底部調整を施している可能性も考えられる。

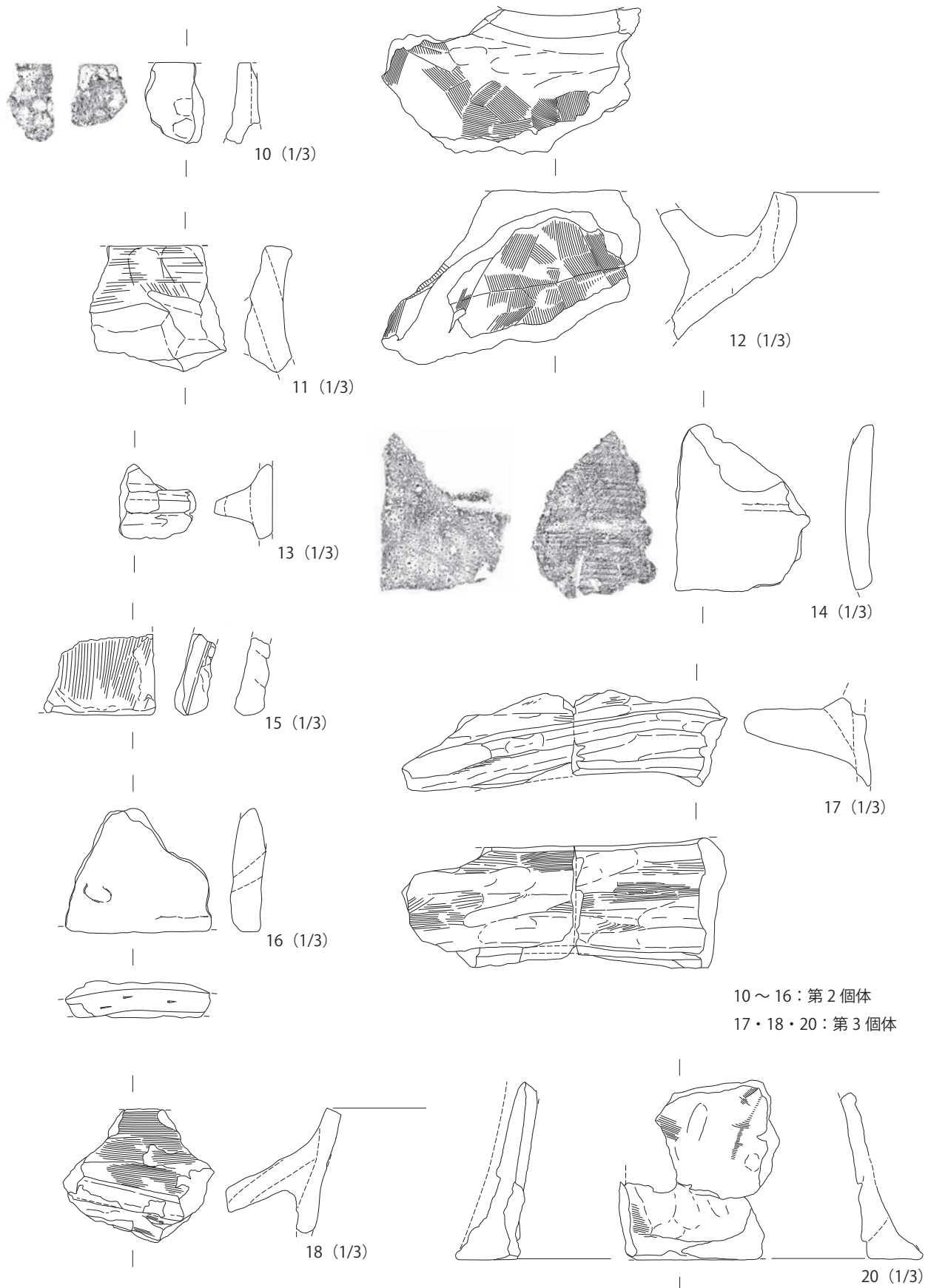
第3個体としたのは、17～21である。それぞれの資料に共通する特徴として、焼成がやや甘く、胎土に1～2mm前後の小礫、赤色粒子を含み、にぶい黄橙～灰白色に近い色調を呈する点が挙げられる。色調や胎土は第2個体と類似するが、第2個体と比較してやや器壁が薄く調整にも相違点がみられることから別個体であると判断した。ひさし部は粘土帯貼付によって成形されており、幅は約4～5cmを測る。ひさし部上下とも横方向のハケ・ナデ調整で、端面はナデによって丸く仕上げられている。また、体部との剥落部にはハケの痕跡がみられる。ひさし部下部には一部にススが付着しており、使用時の痕跡と思われる。

〔不明土製品（土馬か）〕

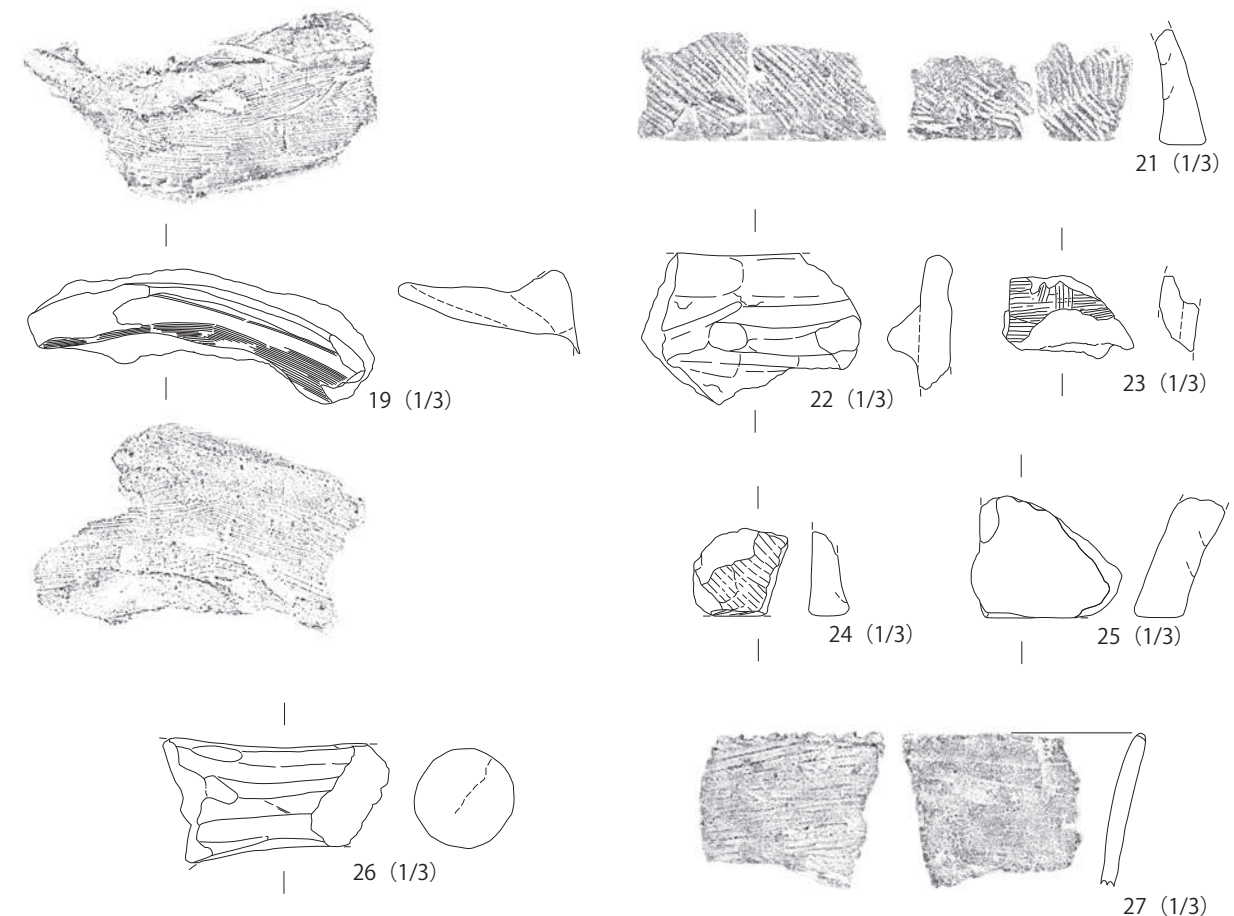
26は不明土製品とした。中実の棒状を呈し、両端は欠損している。断面にみられる接合痕から、2～3cmほどの厚みの粘土板を折り返して成形したとみられ、外面はナデによって整えられている。色調はにぶい褐色を呈し、覆土中の鉄分沈着により赤みが強くみられる部分がある。形状、調整から土



第 3 図 1 号溝出土遺物 実測図 (1) (S=1/3, 1/6)



第4図 1号溝出土遺物 実測図(2) (S=1/3)



19・21：第3個体

22～27：その他

第5図 1号溝出土遺物 実測図(3) (S=1/3)

0 (1:3) 10cm

第1表 1号溝出土遺物 観察表

発掘 No.	報告 No.	実測 No.	グリ ット	遺構	層	取上 No等	器種	部位	法量			色調		調整		胎土	焼成	遺存率	備考
									口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面	外面	内面	外面				
3	1	1	F43	1号溝		29	移動式竈	口縁・ひさし部	(24.0)	—	(9.9)	にぶい橙、橙	にぶい橙、橙	ヨコナデ、ハケ、ナデ、指頭圧	ヨコナデ、ハケ、ナデ	粗砂並 粗砂多 赤色粒含む	良	口5/12	
3	2	2	F	1号溝			移動式竈	口縁部	—	—	(14.0)	にぶい橙、橙	にぶい橙、橙	ヨコナデ、ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	粗砂並 粗砂多 赤色粒含む	良	口1/12	内面に工具によるナデ痕跡あり
3	3	5		1号溝	最下層砂層		移動式竈	口縁部	—	—	(2.6)	にぶい橙	橙	ハケ、ナデ	ナデ、ハケ	礫多 粗砂多 細砂並 赤色粒含む	良	小片	
3	4	4		1号溝	覆土上層		移動式竈	口縁部	—	—	(8.4)	橙	にぶい橙	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	礫多 粗砂多 細砂並 赤色粒含む	良	小片	
3	5	3		1号溝	土層覆土		移動式竈	ひさし部	最大長 (11.0)	最大幅 (3.3)	最大厚 (4.0)	にぶい橙	橙	ナデ(工具)	ナデ(工具)	礫多 粗砂多 赤色粒含む	良	小片	外面被熱
3	6	6		1号溝	最下層砂層中		移動式竈	ひさし部(開口部)	—	最大幅 (10.4)	(12.0)	にぶい橙	にぶい橙	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	礫並 粗砂並 細砂並 赤色粒含む	良	小片	開口部端面工具痕あり
3	7	13	F43	1号溝			移動式竈	体部(開口部)	—	最大幅 (6.6)	(8.1)	にぶい黄橙	灰黄	ハケ、指頭圧	ナデ	礫少 粗砂少 細砂並 赤色粒含む	良	小片	開口部：刀子状工具による切り取り
3	8	7-1		1号溝			移動式竈	体部	—	最大幅 (12.6)	(12.4)	灰褐	にぶい黄橙	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	礫並 粗砂並 細砂並 赤色粒含む	良	小片	
3	9	7-2		1号溝	最下層砂層		移動式竈	体部	—	最大幅 (13.2)	(19.0)	にぶい橙	にぶい橙	ハケ、ナデ(工具)	ハケ、ナデ(工具)	礫多 粗砂多 細砂並 赤色粒含む	良	小片	
4	10	10		1号溝			移動式竈	口縁部	最大長 (4.4)	最大幅 (3.2)	最大厚 (1.5)	にぶい橙	橙	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ、指頭圧	粗砂並 粗砂並 赤色粒含む	良	小片	
4	11	14		1号溝	最下層砂層		移動式竈	口縁部	—	最大幅 (7.3)	(6.8)	橙	にぶい黄橙	ハケ、指頭圧	ハケ、指頭圧	礫極少 粗砂多 細砂少 石英含む	良	小片	内面被熱、ひさし部剥離
4	12	8	G39	1号溝	覆土下層		移動式竈	口縁・ひさし部	最大長 (9.4)	最大幅 (13.9)	最大厚 (8.9)	灰褐	橙	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ、ヨコナデ	礫少 粗砂多 赤色粒含む 石英含む	良	小片	工具痕あり
4	13	12	H32	1号溝			移動式竈	ひさし部	最大長 (4.0)	最大幅 (4.1)	最大厚 (3.1)	淡黄橙	灰白	ハケ	ナデ	粗砂多 粗砂並 赤色粒含む	良	小片	
4	14	9	H29	1号溝			移動式竈	体部	最大長 (9.0)	最大幅 (7.2)	最大厚 (1.3)	黒褐	淡黄橙	ハケ	ハケか(摩耗)	礫少 粗砂多 細砂並 赤色粒含む	良	小片	内面炭化物付着
4	15	15		1号溝	最下層砂層中		移動式竈	底部(開口部)	—	最大幅 (5.8)	(4.3)	にぶい黄橙	灰白	ハケ、指頭圧	ハケ	礫極少 粗砂少 石英含む	良	小片	底面煤付着
4	16	11		1号溝			移動式竈	底部	—	最大幅 (7.8)	(6.8)	淡黄橙、灰白	淡黄橙、橙	ナデ	ナデ、ケズリ	礫少 粗砂多 細砂並 赤色粒含む	良	小片	
4	17	16		1号溝	砂層中		移動式竈	ひさし部	最大長 (5.5)	最大幅 (17.4)	最大厚 (7.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	礫少 粗砂並 赤色粒含む	良	小片	内面一部煤斑あり
4	18	17		1号溝	砂層土中		移動式竈	ひさし部	最大長 (7.2)	最大幅 (9.1)	最大厚 (9.2)	明褐灰	淡黄橙	ハケ	ケズリ、ハケ、ナデ	礫少 粗砂多 赤色粒含む 石英含む	良	小片	断面一部赤化
5	19	18	F43	1号溝		18	移動式竈	ひさし部	最大長 (5.3)	最大幅 (13.8)	最大厚 (7.2)	灰白	灰白	ヨコナデ、ハケ、ナデ	ハケ、ヨコナデ	粗砂多 赤色粒含む 石英含む	良	小片	内面一部煤付着
4	20	19		1号溝	砂層		移動式竈	底部(開口部)	—	最大幅 (8.6)	最大厚 (9.8)	淡黄橙	褐灰	ナデ、ハケ、指頭圧	ナデ、ケズリ	礫少 粗砂多	良	小片	
5	21	20	F43	1号溝			移動式竈	底部	—	—	(4.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	粗砂多 粗砂多 角閃石含む	良	小片	
5	22	23		1号溝	最下層砂層中		移動式竈	口縁・ひさし部	最大長 (6.0)	最大幅 (8.7)	最大厚 (2.6)	橙	明褐灰	ハケ、指頭圧	ハケ、指頭圧	粗砂多 粗砂並 赤色粒含む 石英含む 角閃石含む	良	小片	口縁から内面にかけて一部被熱
5	23	24		1号溝			移動式竈	体部	最大長 (5.3)	最大幅 (5.3)	最大厚 (1.6)	にぶい橙	にぶい橙	ハケ	ハケ	粗砂少 細砂少	良	小片	内面一部煤付着
5	24	21		1号溝	砂層中		移動式竈	底部	—	—	(3.5)	淡黄橙	淡黄橙	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	粗砂多 粗砂多 石英含む	良	小片	底面にハケ調整あり
5	25	22		1号溝	最下層		移動式竈	底部	—	—	(4.9)	淡黄橙、にぶい橙	淡黄橙	不明(摩耗)	不明(摩耗)	礫並 粗砂多 細砂多 白色粒含む	良	小片	
5	26	25		1号溝	砂層中		不明(土馬か)	胴部	最大長 (5.0)	最大幅 (9.0)	最大厚 (4.0)	—	にぶい褐	—	ナデ	礫少 粗砂多	良	—	一部二次被熱により赤化
5	27	26		1号溝	砂層		縄文土器 深鉢	口縁部	—	—	(6.1)	にぶい黄褐	にぶい黄褐	糸痕、ナデ	糸痕	粗砂少 細砂多	良	小片	口縁ギザミあり、外面一部煤付着

馬の胴部、もしくは大型の獣脚の可能性を考えたい。また、器面の一部に二次被熱による赤化がみられることから、土製支脚の可能性も考えられる。

[縄文土器]

27は縄文土器の深鉢（口縁部）である。口縁端部には上方からのキザミがみられ、器壁は条痕調整が主体である。外面に一部ススの付着が確認された。縄文時代晩期～弥生時代前期のものと思われる。

4 移動式竈について

北陸における移動式竈の出土数は管見の限り、57遺跡にのぼる。能登地域や氷見など能登半島に集中しているが（田中2003、新村・松尾2006）、近年は福井県でも全形を伺い知ることができる個体が増加している。

高堂遺跡の既報告で移動式竈についての記述はなく、本稿で紹介した3個体 + α が高堂遺跡における移動式竈の現状の総数である。いずれも1号溝からの出土であり、年代の帰属は、移動式竈と近いグリッドから出土している須恵器から古墳時代後期以降と推測したい^{註2}。胎土なども同時期の土師器などと遜色はないものと考えられる。

全体復元は難しい状態だが、ひさし部など特徴的な部分に着目したい。第1個体（1～9）では、1に見えるように幅広のひさしを有する。また5では焚口下部にひさしがあることからひさしが焚口の全周に付くものと考えられる。さらに1の掛口は大きく外反することから「くの字状口縁」に類する。能登地域ではひさしを持たない、あるいはひさしが上部のみに留まるものが多く、また掛口が内傾するものが確認できる（田中2003）。加賀地域で比較的時期に近いものとして、小松市額見町遺跡にてひさしが焚口を全周する事例（7世紀前半か）が確認されているが、掛口の形状は内傾し上部に平坦部を設けるなど異なる。その他に部位ごとに概観すると、掛口では大きくやや直上に内傾し粘土帶上部1段で外反し端部が丸みを帯びるもの（3、4）、直線的に真上にのびて端部は水平になるもの（10）、端部に面を持ちやや内傾するもの（12、18）があり、基部では端部が丸みを帯びるもの（15）、端部を水平にして外側を削るもの（16）、端部は水平なもの（21、25）、端部が水平で外側にのびるもの（20）などがあり、バラエティーに富み規格化が図られていないことがわかる。

5 おわりに

本稿では高堂遺跡から出土した未報告資料の紹介を行い、主に北陸における移動式竈について新たな知見を得た。前述のように田中の集成（田中2003）以後、北陸において移動式竈の出土例は増加しつつあり、再検討が望まれる。現在整理中の類例も含めた検討については他日を期したい。

本稿の作成にあたり、下記の方々の協力を得た。記して感謝申し上げます。（五十音順、敬称略）
朝倉佳子、安澤祐加、柿田祐司、金山哲哉、澤山 彬、下村 薫、田治菜奈、林 大智、村上泰子、矢木奏美、和田龍介

本稿は、久田正弘氏が本センター保管の遺物を再整理中に「再発掘」した遺物たちを氏から資料化するよう勧められたことに端を発する。令和7年4月に急逝した久田氏の霊前に「報告」することを許されたい。

註¹ 移動式竈は置きカマド、竈形土製品などこれまで様々な呼称がされており、定着を見ていない。本稿では二次的な移動が可能であることを重視し、移動式竈と記述する。

註² 1号溝は調査区のほぼ中央を南北に走る流路であり、報告時には「主たる存続期間は、～9世紀後半から10世紀初頭頃」（戸潤・湯尻1990）とされているが、未実測・未掲載の遺物には古墳時代後期の須恵器や縄文土器などが含まれ、遺構の存続時期には幅があるものと推測される。

《参考文献》

池野正男2025「越中・能登の5～7世紀の手工業生産遺跡と置き竈」『学究無限』吉岡康暢先生卒寿記念論集刊行会

田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

田中昌樹2003「北陸地域の『竈形土製品』について」『富山考古学研究』第6号（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

戸潤幹夫・湯尻修平編1990『小松市高堂遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

新村いづみ・松尾実2006「北陸地域における渡来形遺物群の集成」『石川県埋蔵文化財情報』第15号（財）石川県埋蔵文化財センター

石川県埋蔵文化財情報 第 54 号

発行日 2026（令和 8）年 8 月 31 日

発行 公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731
URL <https://www.ishikawa-maibun.or.jp>
E-mail address daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印 刷 (株)ハクイ印刷

©（公財）石川県埋蔵文化財センター